
はいだらけ

あどん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はいだらけ

【Nコード】

N4219I

【作者名】

あどん

【あらすじ】

人はだれでも死ぬのです。

その通りです。でもいつかでしょう？ いいですよ何年も先なら。

でもね、僕、何でも死ぬそうですねですよ近日中に。

なんでかって言うと予言されちゃったんです転校生に……。

死相出まくりの少年（僕）と転校生のヒロインがおくる。ちょっと不思議で悲しい物語。

乞うご期待！

序章

我が武勇伝をお聞かせしよう。

そのいち、生まれてすぐ落とされた。

医者 of 野郎が手を滑らしたらしく、こつこつとぽってつと……ざけんな！

そのに、自転車にはねられた。

あれは競輪用の奴だったろうか？ まあとにかく車道を走っても文句ないスピードのチャリが、リーマン風のおっさんがのったチャリが、僕をボーンとはねて逃げやがった。慰謝料はらえ！

そのさん、洋服ダンスにつぶされた。

あれ？ 今揺れた？ ってくらいなの、のちの調べによると震度2の地震で倒れたたんすがガーン、あのせいで僕の成績は芳しくないに違いない。軟弱な筆筒め！

そのよん……と続けてもいいのだが、いい加減聞くほうも飽きたろうし、話すほうも痛い、心が。

僕は小さなころから幾度も死にかけている。絶対に何かがとりついているのだろう。

かつてお祓いにいったとある神社では『きえ〜い！ 呪いじゃ！ 呪いを持ち込む出ない！』とか言われて神社の入り口で追い返されたこともある。

おみくじは凶以外ひいたことがないし、タロット占いではカマもったガリガリ野郎ばかりが、まるでマジックのように現れる。種も仕掛けもございません。

そんな死相に愛された、いらねーけど、愛されてしまった僕にとっても、その日は最悪だった。

朝、お茶をこぼした。それはいい、が、その模様がどう見ても『死』と読めたのはまずい。ひらがなではない、漢字で『死』。なんて器用なお茶なんだろう。

登校時、突如便意に見舞われた僕は公園のトイレに駆け込んだ。何の気なしに飛び込んだ男子便所一番奥の個室で、やれやれどっこいしょと腰を下ろした僕が見たものは、

落書き

『これを見たやつ今日しぬからマジで』

……マジで？

そして今。僕の目の前には見知らぬ女の子が。

本日転校してきた星野ひかりさん。しゃれた名前がうらやましい、僕なんか名前の最後が“たろう”だというのに。いや話がそれた。名前のことなんかどうでもよくて僕が言いたいのはつまり

「ええと、今何と？」

これだ、でもって彼女の回答は。

「君、近日中にしぬよ、たぶん」

これだ。

夏休みも間近に迫った7月、中途半端な時期にやってきた彼女はいきなり予言しちゃったのです。

なにを？

僕の死を。

勘弁してくださいよ。

一章 僕は、はいだらけ

ふつう、初対面の人間に死を宣告されたならどういった反応をとるものだろうか？

ビビる？ おこる？ 無視する？

まあ、いずれにせよその心中穏やかならざることとは間違いないだろう。ふつうは、だ。

けれども僕ぐらいのレベルになると、

公園でマイホームをこしらえた仙人みたいなルックスのおばあさんに突然呼び止められてお守り渡されたり、

片手にだけ手袋はめたまゆ毛の濃いお兄さんに呼び止められてお被いされたり、

ひとなつっこいチワワに逃げられたり、

そんなことが日上茶飯事な僕にとっては

またか

と思う程度でしかない、なんの感慨もわかない、なれちゃってます、正直。

だから僕は全くの無防備にその日を過ごし、帰路に就こうとしていたのです。

そして……

そして、知ってしまったのです。

彼女の予言の正しさを、

それは、これから僕の身に降りかかる災難の一端にすぎなかったのだけど……

一章 その2

本日のお務めも終わり、いざ我が家へ、と教室を後にした直後のことである。

「おい」

潰れたかえるみたいな声が後ろから聞こえた。

正確に文字にするとむしろ『ぎよい』だ。それはほとんど雑音のようにはしか聞こえず、ゆえに僕は特別な注意を払わずに、もちろん振り向いたりなんてするはずもなく、今日の晩御飯何かなあ、と平和ボケまっしぐらに教室を去ろうとしていた。

が、

ぼってつとした何かは僕の肩にはりついた。

ぼてつとではない、ぼってつとだ。この微妙なニュアンスの違いが伝わるとは思わないが、肩に乗った後、ワンテンポははさんで密着する感じに、それはそれは気持ち悪い何かは僕の肩に乗ったのであった。

僕は思わず息をのんで振り向いた。

ぼってつとしたものがそこにあった。

人間で言つと頭に当たる部分にはぼってつとした何かのっかり、人間で言つと体に当たる部分にはぼってつとした何かは小山を作り、

人間で言つと手に当たる部分がぼってつと僕の肩に連結され、なんとそれは人間なのだった。

「おい、お前、ちょっと来い（ぎよい、おびやえ、ちよつぎよい）」
たぶん、それはそう言ったのだと思う。

一章 その3

大山大、上から読んでも下から読んでも大山大。人名である。

身長180cm（推定）、体重100kg（推定）、生物学的分類は人類（推定）。

僕のクラスメイトにして我が校の誇るアンアイデンティファイド
ミステリアスアニマル、

生体は不明。話したことがない。

彼と仲のいい鈴木君曰くいい人らしい。

なんでもふるまいの中にそこはかとなく相手への思いやりを感じ
るのだとか。そこはかとなく？

しかしまあ、僕とは接点のない人なわけで、だからいきなり『ぎ
よい』と話しかけられるのはイレギュラーな出来事なわけで、もっ
というなら2人きりで屋上にやってきて向かい合っている今のこの
状況はベリーイレギュラーなわけで、

「……………」

僕は気まずいわけなのだ。

そしてどういわけか大山君は先ほどから黙りこくったままうつ
むいている。なんとなくだが、きつと気のせいなのだが、いやもう
間違いない勘違いなのだが、

彼が恥じらっているように見える。

まるで恋する乙女のように、

屋上に意中の彼を呼び出して、

長年の片思いを今まさに告げようとする乙女のように、
相手はだあれ？

僕なのでしょうな。

いやないないないないないないないないないないない

!!!!!!!!!!!!!!

しまった『ない』が途中で『いな』になってしまった。

じゃなくてっ！ そんなことはどうでもよくてっ！

これはどういうことなのだ？

なぜ顔をあからめる？

なぜつま先でのの字を書く？

僕は男で、大山もたぶん男で、無理なんです。男と男で子孫は残せないのです、人間の運命なのです

人間？

しまった！ 大山は人間じゃない！ まさか、まさか無性生殖ができるのか？

……と冗談はこの辺にしておいて、気まずすぎて変な妄想をしてしまったではないか。

いい加減待つのにも飽きてきたし、大山は話し出す気配がないし僕は自分から話しかけることにした

「何か話があつたんじゃない…ですか？」

何敬語で話してるんだ僕！

「……だ」

「え？」

いまとんでもない言葉が聞こえたような。

「好きだ」

っ！（すぎだ　っ！）

「え」

っ？！

妄想が！ 妄想が現実に！！

「だいつ好きだ」

っ！！（だいつすぎだ

っ！！）

この日僕は死んだ……と思った。

一章 その4

自分が死んでも世界は回りつづけるなどどうして言えるだろうか？

自分の世界が崩れるというのに

それは一つの世界の崩壊であるのに

ほかの世界が崩れないとどうして言えるだろうか？

と、世界の崩壊を目の前にして、僕はぼんやりと考える。

そうだ、世界は終わったのだ。終わったに違いない、だってこんなに真っ暗なもの……。

ぼってつとした何かが首に触った。

それはさながら巨大なヒルのように僕の首に絡みつき、

ぐふっ?! ヒルじゃない! これは蛇だ、アナコンダだ。首が折れるっ!

ぱちりと、目が開いた。

目を閉じた記憶はないのだが、おそるべき現実を直視できなかったらしい、道理で暗いわけだ。所詮世界など、僕が目を閉じればあらゆる不思議、消滅してしまう程度のものでしかないというわけか。

では蛇の正体は？

目を開けた瞬間から丸見えだ、世界を滅ぼした魔王、じゃなくて、いやあながち間違いでもないけれど、大山の生ハムのようなぶつと腕が首を絞めていた。生命の危機である。

僕は酸欠の金魚のようにパクパクと口を動かしながらハムをたたいた。

ギブアップ! ギブアップ!!

しかし、大山選手、手を緩める様子はありません。おおっと、大山何か言っているぞ!

「てめえ、今日何話していたんだ？（でベーぎょうばにはなじでいだんだ）」

話ってなんだ？ 彼は何の話をしているんだ

！？

「ぐぐ……ぐつ」

「言え！ こら、言えっ！（びえこらびえ）」

「ぐぐ……ぐつ……」

薄れゆく意識の中で僕は思った、ついに僕の悪運も尽き果てたのだと。

僕は不幸だった。

数え切れないほどの死線をぐぐり、かといってその経験が僕を戦歴の勇者にしたかというとそんなことはなく、デメリットのみを一方的に押し付けられたあわれな被害者であった。

でも、

僕は今まで生きていた。

首の据わらない赤ん坊が高いところから落とされて骨折ひとつしないなんて奇跡だと医者と言った

トラックにはねられてかすり傷ひとつおわらないなんて神様のおかげだと母は泣いた

なんやかんや言って僕はラッキーだったのかもしれない……

僕は死を覚悟した。

「放してあげて」

ささやく程度の音量でしかないのに、不思議なほどよく通る声が僕の鼓膜を震わせた。

とたん僕の体は支えを失いひざまずく、

ひどく懐かしい気がする新鮮な空気が肺を満たし、ほとんど咳をするようにして呼吸を開始した。

それから顔を上げる。

そこには太陽と、それから、

それから、真昼の空に浮かぶ星のひかりが見えた。

一章 その5

いったいつから見ていたのだろうか？ 星野ひかりがそこにいた。短めの髪は、暗い教室では気づかなかったが、すこし赤い。大柄の大山を前に、すつくと立つ姿は凜凜しく美しい。穏やかな表情は、すごく大人っぽい。

統合すると、彼女は輝いていたのである。まるで星のように。

大山は阿呆のような顔をして星野さんを見つめた。

ぷぷつ、変な顔、と内心ほくそ笑みながら、僕はこっそりと自分の顔をなでまわす。あつ！ 変な顔！

「ず」

変な顔その1、大山が奇声を発した。

「ず？」

これは変な顔その2、輝く彼女は動かず騒がず待ちの姿勢。

「ずぎだ つー！」

変1

「えええええ

つー！」

変2……ではない、どこことなくデジャブを感じるこの発言は星野さんのものだ。輝く彼女は突如超新星爆発を起こしたらしく、先ほどまでの大人な雰囲気はどこへやら、わかものらしく叫んだ。

「誰がつ？」

「びよれがつ！ おびやえをつ！（俺が、お前を）」

「なんでっ！」

「だ、大っずぎだ

つー！」

なんだろう。完全に蚊帳の外だ。

「いや……いやです！」

「それでも、大っずぎだ

つー！」

星野さんは泣きそうな顔でこっちを見た。そんな目で見られても困る。

精一杯困った顔で無言の返答する僕を見て、彼女は僕のメッセ―ジを理解したらしい。ぽんっと手を打つと一言
「彼を好きにしていいいから」

え？

「もう止めないから、ごゆっくり〜」

ひるがえった赤毛がひかりを反射して一瞬きらりと輝く。

キイバタンと、油のたりない扉が音を立てて閉まり、彼女は本当に屋上を後にした。

寒い風が吹き、僕は油の切れた扉よろしく、大山に目をやった。

キイバタン

今度こそ駄目だと、僕は思った。

一章 その6

激しい戦いだった。

その後、荒れ狂う大山と僕は火花を散らしあった。

揺れる巨体は大地を揺るがし、

揺れる拳は大気を切り裂き、

揺れる顔の肉はカオスのごとく予測困難な軌跡を描き、

揺れる……ああもうめんどい！ 要するに大山は躍動感あふれる動きで襲いかかってきたのであった。しかーし！ 僕から見ればまだまだ甘い動きであったな。野犬とか不良とか変なおじさんとかに日常的に追いかけまわされている僕の華麗なる動きに、あの巨体が追いつくべくもない。

そうして、拳で語り合うこと3時間、夜の帳も落ちた屋上で、僕らの間には友情にも似た感情が生まれていた。

披露困憊し倒れ込む大山、

それが引き金であったかのように、僕の体はアスファルトに吸い寄せられた。

わずか数十センチの距離を隔てて、僕らは互いの健闘をたたえあった。

『びよれのまげだ……』

『あと1秒でもお前が動けていたら僕の負けだったさ……』

そして巻き起こる観客達のスタンディングオベーション……はなかつたけれど、僕の、否、僕たちの耳には確かに聞こえていたのだ。で

確かな友情を結んだ僕らは、とある共通の思いを抱いていたのだ。

『星野ひかりに一言を』と

一章 その7

「だのぼーっ！」

「たのもーっ！」

翌日、僕と大山は肩を並べて登校した。

胸に秘めたる思いは違えど、目的を同じくする戦友として我らの
結束は海よりも深く山よりも高い

…… 結束が深いってどんな感じだろう？

まあ、いい。要するに程度が甚だしいということだ。

その程度が甚だしい結束によって結ばれた僕らは、えいやっと教室前方の扉を開き、

「……」

星野ひかりが教室にいないことを知った。

職員室で、僕らは担任に詰め寄った。

「本人から電話があつてね、用事が入ったから今日は休むと」

「用事って？」

対人コミュニケーションは僕の役割だ。大山語では正確な意思伝達を行なえない可能性がある。

「それが、家庭の事情ですって言って一方的に切られてしまったよ
そう言つて、初老の男性教諭は遠い目をした。

「最近の子供は何を考えているかがわからん……そもそも伝える気がないようだ。私の若いころは生徒というものは本音で教師にぶつかってくるものだったのだが……私はどうすればいいのか……」
そんなことを僕に言われても困る。

「ところで、君たちは星野さんとは仲がいいのかい？」

「ええと、まあ、はい」

適当に答えておくことにする。

「じゃあ、これ届けてくれるかな。今日配布したプリントだ。で、

住所がここ」

なんだか思いがけない展開になってきた。

担任はプリントとメモを手渡し、疲れ切った表情で最後に、

「彼女のことを、頼んだよ……」

もちろんですとも。

一章 その8

木造2階建て、ざっと5LDKってところかな、学校から、駅の反対に向かって少し歩いたところに、星野家はある。僕の町は駅から離れるにつれて田んぼと畑の面積が指数関数的に増加するため、この辺はすごく田舎くさい。なんだかその田舎くさが星野さんの雰囲気にとぐわない気がする。

「ぎよぎよが（ここか）」

ここに来るまで無言だった大山が口を開いた。

「ここだ」

僕らはどちらともなく顔を見合わせ、インターホンに指を伸ばした。

ピンポーン

確かに鳴った。でも誰かが出てくる気配はない。

再びピンポーン。誰も来ない。またまたピンポーン。やっぱり駄目。

「いないみたいだね……」

そうして僕は何の気なしに、2階を見上げ。

「うぎよっ!!」

大山みたいな声を出して尻もちをつくことになった。

「大山……あ、あれを見る!」

震える指が2階の窓をさす。

そこには、

窓に顔を押しつけ、ゆがんだ表情で僕らを見下ろす老婆の姿があった。

「びよしの!（星野!）」

突如大山が叫び、生ハムのような腕でもって星野家の玄関扉に手を伸ばす。鍵がかかっていたのだらうその扉は、数秒の抵抗も空し

くあつさり降伏、大山は巨軀をふるぶると躍らせ室内に侵入した。
「さて！ 大山！ 室内には妖怪がいるぞ！ っていうか不法侵入だ！」

「びよ〜しの〜！」

だめだ、まったく聞こえていないらしい、しかし、大山にはあの妖怪が星野さんに見えたのか？ まさか老婆の妖術？！

大山をおつて自分も家の中に入るべきか、いやその答えは明確にNOだ。まだ前科はほしくない、そうではなくて、次にどうするべきか迷っていた僕は、

「ぎゅうお

っ！」

巨大な黒板を巨人が爪でひつかいたような、心臓に悪い音にすくみあがった。

今のは絶対に人間の声ではない、魔物だ！

「お、大山！」

あ、足がすくんで動けない、どうしよう。大山が……大山がっ！

「ぎょうえ

っ！！！」

「ぐっ……お やま っ！」

僕はなけなしの勇気をかき集めて星野家に突入した。肝心な時にビビっていて何が男だ！、何が戦友だ！！

勝手のわからない室内で、目につく部屋を片っ端から確認し、ようやく階段を発見、

まってる大山！

駆け上がった階段の先には木製の引き戸が開け放たれ、僕をいざなっているようだった。

どこへ？

どこだろうと構うものかっ！

僕は勢いに任せて部屋に飛び込み、

デジャビュを感じた。

妖怪が大山に首を絞められて白目をむいていた。

What is this?

一章 その9

「ひかりはワシのひ孫よ」

僕は妖怪、じゃなくて、星野さんのひいおばあさんと向かい合って正座していた。

「今年で103歳、とめちゃんと呼んでね」
「嫌です」

その後、大山は星野（老）に向かって愛の言葉を投げかけ続けた。そして、

とめちゃんは恋に落ちた。

え？ っと思っただあなた、僕と気が合うかもしれません。

星野さんとこの妖怪老婆は同じものなのですか？ 大山君。

絞殺をもくろむこの人間もどきがいいのですか？ とめちゃん。

僕の言葉にならない言葉は当然のことながら完全に無視され、寄り添うふたりと向かい合う形で僕は正座しているのであった。

「ところで、星野さん……ひかりさんは今どちらに？」

僕は星野（老）に話しかけた。大山と寄り添う姿が……うつぶ、きもい。

「とめちゃんと呼んどくれ」

きもい。

「……とめちゃん」

「もう一回！」

きもい

「……とめちゃん」

「もういっちょよ！」

「きもい」

あっ！ 言っちゃった。

自分の失言を悔いる間も有らばこそ、むちよ、っつと、変な効果音

と同時に大山の巨体が膨れ上がり、どんどん膨れ上がり、天井を覆い尽くした。

「これまずいかも。」

「今、なんていったんね？」

優しいとめちゃんのお言葉。

「と、とめちゃんと申しました！」

僕は頭を畳に接触させた。

おのれ、大山め！ 僕と契った友情はこのババアに劣るものであったというのか？

「うむ、よかろう……で、なんの話だったかね？」

偉そうに！ 心の中だけでそう呟き、僕は土下座のまま答えた。

「ひかりさんは今どちらにおられるのですか？」

「知らんね」

「はあ、そうですか、では僕はこれで」

帰ります、僕はそう続けようとした。もうここにはいたくありません。

しかし、ババア、否とめちゃんはありがたい詔をお発しになられたのであった。

「知らんから、探してきとくれ」

「え？」

「場所は、やまびーが連れてってくれるから」

とめちゃんの指は、しっかりと、大山をとらえていた。

き、も、い！

雨が降り出し、僕はとめちゃんが渡してくれた傘を開いた。

かなり大きめの傘だが、ふたりで使うと（おもに大山のせいで）かなり小さい。必然的に体を密着させる形になった僕は大山の顔を見上げた。

彼はピンクのハンカチに鼻を押し当てては放し、鼻をびよこびよこさせてはまたハンカチに鼻を押し当てるということを繰り返している。

大山に特殊な趣味があるというわけではない……と信じたいが、嬉しそうなおいをかぐ彼の姿を見るにもしかしたら……、いや人を、戦友を疑うなんて駄目だ、間違っている。

彼はしかたなくやっているのだ、おいでひかりさんを見つげるために。

アレ？ やっぱり変態かも。

『墓地に行け』

とめちゃんはそう言った。

なんでだろう？ 実はなんとなく想像はついている。

とめちゃんとかくだらないやり取りをした、あの居間には、大きな仏壇があった。

小さくなつた線香から煙があがり、お米も添えてあった。

そして、なによりも目立つのが写真。

若い男女の写真。

長くきれいなブロードヘアの女性がはにかんだように笑い、その横で真っ黒に日焼けした男性が歯をひからせて親指を立てている。

あまりにも幸せそうで、だから余計に悲しい写真。

ひかりさんは墓地で何をしているのだろうか？

それは僕なんか踏みいってもよいものだろうか？

「とめちゃんはなぜ僕らを墓地に行かせたがったのか？
何も分からずに僕は歩く。」

「大山」

「ぎよい？」

「ひかりさんに会ってどうするの？」

「ぎよい」

何も考えていないらしい。

僕は文句が言いたいだけだった。

よくも見捨てやがったなコノヤローと、一言言えればよかったのだ。

それがどうしてこんなことに？

正直重い、重すぎる。ひかりさんに会いたくないです。

でも、もう墓地はすぐそこで、

小柄な人影がひとつ、傘もささずに雨ざらしで手を合わせている。
重すぎるよ……。

一章 その11

僕たちは墓地に入って行った。大きさも形もほとんど変わらない石の構造物、だけれども、その一つ一つには全く異なった意味があるのだろう。

僕は祈り続ける彼女に近づき、言った。

「星野さん」

「なに？」

彼女はこつちを見もせずに行った。

全く驚いた様子はない、僕たちは想定外の訪問者であるだろうに。

「こないだはよくも見捨てやがったなコノヤロー」

「そっち!？」

星野さんはすごい勢いで振りむいた。ショートヘアを伝って発射された水滴が僕の靴にかかる。

「もっと別に言うことがあるんじゃないの!？ ほら見てよ! 私、雨に濡れてる! 墓の前で! 一人で! 知り合いの女の子が一人で、こんなところで、こんなことしてるのに不思議に思わないの? 思うでしょ!」

なんかエキサイトしだした。

「こんなところで何してるの?」

「もういい! 知らない、教えない、帰れ!」

「いくぞ、大山」

「ちよつと待って!」

「なんだよ」

しつこい奴だ。

「私を置いていく気? 私が雨に濡れてるって言うのに、そこんとこ男としてどうよ」

……私の家にまで行ったくせに……」
なぜそれを知っている?

僕は一瞬ギクツとしてから、傘を見上げた。そう言えばこれは星野さん家の傘だったのだ。

「どこまで聞いたの？」

小さな声、いきなりの語調の変化に僕は戸惑った。

「私がここにいて、ばあちゃんから聞いたんでしょ？」

「……ばあちゃん、他に何か言っただけ？」

何も言われなかった。

でも、

居間で見た写真。あれはとめちゃんがわざと僕らに見せたような気がする。それが気まぐれなのか、なんらかの意図を持つてのものなのかはわからないけれど。

「何も言われなかったよ」

僕はとめちゃんの意向をくむことにした。彼女はあえてなんの説明もしなかったのだ……ろうか？　なんだかあのばあさんを買っていているような気がする。

「何も？」

「うん」

詰問するような口調で僕を睨む彼女にやや気押されながら、僕はうそをついた。ついでににらみ返してやる。

「……」

と、星野さんは体をこちらに向けると蛙とびで躍りかかった、のではなく、思わずのけぞった僕の横をすごいスピードで通り抜ける。「なーにビビってたんだか」

せせら笑う彼女の手には、傘。そして僕と大山は雨ざらし。

「な、返せよ！」

「嫌だよ、これ私のだし」

「もう濡れてるんだから関係ないだろ、走って家に帰れよ」

「駄目、今日は日が暮れるまでここにいなきゃいけないから、風邪ひいちゃう」

日が暮れるまで？

「それはどういう……」

僕は質問の途中で口をつぐんだ。

彼女はもう、僕を見てはいなかった。その視線は遠く市街のほうを見ているようだ。

「行かなきゃ」

彼女は眩き、走り出した……傘を持って。

「おい！　せめて傘は置いていけ！」

状況が読み込めないまま僕は叫んだ。それを当然のように無視して彼女は走る。

僕は大山と顔を見合わせた。

なにがなんだかさっぱりだが、追いかけるべきなんだろうな。僕はそう思い、走り出した。

一章 その12

速い。

星野さんのほっそりとした背中がぐんぐん遠ざかる。

「びよれをおいていげ（俺を置いていけ）」

わずかに後ろを走る大山が言った。自分が足手まといになることを恐れたらしい。

大山、お前は男だよ……。

「びよれはにほいでわかるから（俺はにおいでわかるから）」

……大山……。

僕はピンクのハンカチをひらつかせる大山を背に、ギアを上げた。

脚力には自信がある。それは僕が日常的にされされてきた生命の危機に由来するわけで、ジャ○アンに追いかけまわされる○び太君の逃げ足が速いのも同じ理屈であるのだ。

「納得した？」

僕は隣を走る星野さんに尋ねた。

あつという間に追いついた僕に向かって、

『速っ！』と突っ込んだ星野さんに説明してあげたのだ。

「ぜんぜん！」

つれない返事だ。話題を変えよう。

「どこに向かってるの？」

「教えない、ついてこないで！」

ますますつれない。

「なんでさ？」

「ついてきたら君死ぬよ」

「またか……」

「信じてないでしょ」

「いや、そういうわけじゃなくて……そういうの言われ慣れてるか

らさ、死ぬとか、呪われてるとか」

軽い感じにニヤけて言ってみた。

「だったらなおさらついてこないで！」

叫ぶような返答、声が少しかすれているのは息が上がっているからだろう。

「でも……」

ここまで来て帰れと？

「でも、じゃない！ いい？ よく聞いて。この先に川があるのは知っているでしょう？ 私はそこに向かっているんだけど、もし君がついてきたらその川でおぼれて死ぬ。間違いない」

それなら問題ないな。

「大丈夫、おぼれた経験もあるから」

「何が大丈夫なの！？」

「それにしようがないよ、もう見えてるもん」
橋が。

もちろんその下には川が流れていて、なんと僕はそこで溺死するらしい。

……一応、川には近付かないでおこう。

そんな決心は川を見たとき一瞬で砕け散った。

「川に近付いちゃ駄目だよ」

星野さんの声がひどく不明瞭に聞こえた。

だって、僕の五感の一点に集中していて、聴覚も平常業務を放棄していたのだから。

人がおぼれていた。

一章 その13

はじめは流木か何かだと思った。

跳ね上がる水、一定の周期で上下する何か、それらをぼんやりと眺め、その何かが球状であることが分かった時、僕は突然気がついた。

「……人がおぼれてる」
「……ついてきちゃ駄目だよ」

すつ、と横を走っていた星野さんがスピードを上げた。反対に僕は立ち止り、橋の欄干から身を乗り出すようにしてそれを見る。

死に物狂いで手足をばたつかせる姿は小さくまだ子どものような。僕がおぼれたのも、そう言えば小学生のころだったっけ……。

あの時、僕も必死だった。死ぬのがあんなに怖いものなんて……もう知ってた気がするけど、とにかく怖かった。突然後ろから力強い腕に抱きすくめられ、それでも恐怖がやまずに僕はその腕にむしやぶりついた。

あとで助けてくれた人が笑いながら言っていたっけ。

『子どもだからって侮っちゃいけない、おぼれる者はわらをもつかむんだから。』

泳ぎに自信があったって、迂闊に近付くと自分まで引きずり込まれるんだよ『』

びびびっ、となんかの電波を受信したわけではないけど首筋に嫌な悪寒が走った。

霊感、の一種なのかもしれない、何度も命の危険にさらされるうちに、僕は本当に大変な目にあう前にはかならず、このびびびっ、が来るようになってるのだ。

僕は星野さんの細いシルエットを探した。

いた！ もう川辺まであと少しではないか。

「星野さ んっ！」

だめだ聞こえてない。

「星野ブ…おえっ」

のどが痛い。

僕は下を見た。おぼれる人影はほとんど位置を変えず橋の下だ。

僕は覚悟を決めた。

僕の予感によく当たる。だからこのままだと星野さんによくないことが起こるに違いないと、僕は思った。だってその時はまだ僕は地上で、川に飛び込もうとしているのは星野さんで、わが身に災厄が降りかかるはずなどないと思っていたから。

でも、僕の予感が、僕の置かれている今この状況を予期してのものだったとしたら……。

ぐんぐんと近づく水面を見ながら、そんなことを思った。

僕はかつこよく頭から飛び込んだ……というのはうそで、無様に尻から飛び込んだ。いったん重力に引かれて頭まで沈んでから再び浮上、頭を激しく左右に振って水を飛ばすと、視界が回復し、ドキツとした。

真正面におぼれる子どもの姿があった。いや、顔があった。おぼれるものはかくも苦しげな顔をするものなのかと問いたくなるような劇画調の苦悶顔。

かわいそうに、もう大丈夫だよ……。

僕は何のために飛び込んだのかも忘れて手を伸ばした。仮に覚えていたとしても、僕にはこの少年をこれ以上ほんの少しでさえ、放っておくことなどできはしなかっただろう。

少年の暴れる手と、僕の慈愛に満ちた手とが触れ合った瞬間、少年の体はまるでそれまで行っていた無秩序運動は何かの間違いでしただと言わんばかりの動きで、いささかの迷いもなく僕に向かって移動を開始、わずかののちには僕にむしゃぶりついていた。

暴れる少年が僕の浮力を乱し、僕たちはそろって水中に沈んだ。少年の動きが激しくなる。

暴れるな！

心の中で叫んでみても伝わるはずがない。

雨が水面をたたく音が、不規則に大きくなったり小さくなったりした。

これはまずいかも……。

『この子を捨てればいい』

ふと、そんな考えが浮かんだ。まるで頭の外から飛び込んできたみたいな感じがした。

『知らない子だし』

違う、これは僕が考えているんだ。

『誰も僕を責めはしないさ』

そして、この考えはおそらく正しい。
でも、

あの苦しげな顔を見てしまった僕には、そんなことできるはずもなかった。

暴れる少年の脇の下に手を入れ、その小さな体をできるだけ持ち上げる。その反作用で僕の頭は水面下に沈み、雨音が遠くなった。とにかく少年を安心させよう。そう思っただが、はたしてどの程度の効果があることやら。

僕は目をつむって祈った、僕が力尽きる前に少年の混乱が解けますようにと。

腕はしびれ、息も苦しい。それでも耐えられたのはもしかしたら祈りの成果だったのかもしれない。

突然、腕の重みが消えた。

なぜかと考えることもなく、僕の体は空気を求めて浮上する。

「うばえ……今の聞き苦しい音は水のはじける音です」

ああ、酸素がうまい。僕は頭を振って水を飛ばしながら思う存分空気を吸った。

「……ずいぶん余裕じゃん」

なんとも心外な言葉。

「ついてこないでって言ったのに」

少年を支えながら星野さんがすぐそばに浮いていた。

「いや、僕は星野さんが……、いや、ありがとう」

「私がどうしたの？」

「なんでもございません」

なんとなく恥ずかしい。

数十秒にわたっていぶかしげな視線を僕に照射していた星野さんは、ふいと視線を外すと川辺を見た、つられて僕も視線をそちらに移す。

川辺には2、3人の子ども達がいた。おそらくはおぼれていた子

の友達か何かだろう。

「泳げる？」

「大丈夫」

男の意地でこう答えた。実際は腕がしびれて力が入らないのだけど、自分ひとりで泳ぐ分は問題ないだろう。

僕の返事を聞いてから、星野さんは泳ぎだした。華奢な割に力強い泳ぎだ、子ども一人を抱きかかえるような格好で泳いでいるというのに、その動きには全くよどみがない。ふと、自分などがでしゃばらなくても星野さん一人で何とかなっただのではないかと、ネガティブな思考が浮かんだ。

僕はぼんやりと後に続いていた。すでに僕の役割は終わったものだと安心していたのだ。星野さんとの距離はだいぶ離れてしまっていたが、流れの速い水の中でも、自分一人では沈むことはないだろうとのんびり構えていたのがいけなかった。確かに僕は大丈夫だったろう、でも

「星野さん！」

僕が気がついたとき、それは同時に星野さんが気がついたときでもあったのだけれど、その流木は近付き過ぎていた。僕の抱き枕にでもよさそうなふっとい流木が、流れとほぼ水平に星野さんたちに迫る

彼女はその接近に気付くや、おぼれていた少年を背中にかばった。音はなかった。ただ、激突と同時に星野さんの細い背中がそりかえり、それつきり動かなくなったのが見えただけだった。

「星野さん！」

僕は動かない腕を酷使して、無様に前進を開始した。

一章 その15

「それからどうなったの？」

ベツトの上、首に包帯を巻いた星野さんが横になつたまま尋ねた。

「降ってきたんだ」

「何が？」

「大山が」

「びよい」

僕は何とか星野さん達のところまでたどり着いた。

そして、途方に暮れた。

ふたりの体は重なり合うようにして水上に浮かんでいた。ところが重いのがこれだ。押しても押しても一向に川辺は近くならないし、足はつりそうだし、寒いしで、何度もあきらめようかとも思ったほどだ。川辺でギヤーギヤー騒いでいた子どもたちの目がなければ実際にそうしていたかもしれない。

おそるべき恥の文化！ 僕の生存本能すら押さえつけてしまつては！

で、僕は徒労を重ねていたわけだけれど、突然、頭上に影が下りた。

その影は指数関数的に大きくなり、あわてて顔を上げた時にはもう、手遅れ。両手を翼のように広げた大山が僕のすぐ真横に着弾し、ポンペイを一夜にして滅ぼしたというベスビオ火山もかくやといふべき爆音と衝撃、気がつくとき、そこは川辺で、星野さんも少年も大山もみんな打ち上げられていた。誰が呼んだのか知らないが、救急車がやってきたときには星野さんも少年も目を覚まし、首に痛みを訴える星野さんと特に問題なさそうな少年を連れて病院へ、その翌日である今日、僕と大山は担任の初老教諭の命により、学校を休んだ星野さんの様子を見に来ることと相成った。

「というわけなのです、ちゃんちゃん」

「……」

おどけて言ったのに、星野さんはにこりともしない。

「感謝の言葉は？」

「大山君ありがとう」

「僕には……？」

「ところでさ」

「無視かい」

「何で生きてるの？」

僕の話聞いてなかったのか？

「だから、それは」

もう一度説明しようとしたとき、

「元気か？ やまぴー」

どうもこの家族は僕の話聞く気がないらしい。ドアを騒々しく開けてとめちゃんが入ってきた。

「ぎょい！」

尻尾を振らんばかりの様子で大山がとめちゃんに飛びつく。

「おお〜よしよし」

それを見て、僕は実に複雑な感想を抱いた。

宇宙人が地球にやってきて初めて、ゴールデンレトリーバーとじやれる小学生を見たらこんな感想を抱くかもしれない。逆でもいいな、リトルグレイと戯れるチュパブラを見た地球人の感想。

「何が起こってるの？」

ここにきて初めて感情のこもった表情で、星野さんがつぶやく。

無理もない。ばあちゃんがチュパブラなのだから。

「見ての通りだよ、星野さんが大山に冷たくするから大山は君のおばあちゃんに慰めを見出したのさ」

「……」

星野さん、啞然。

あまりの衝撃に、とめちゃんが『ちよつとお茶してくるからの』と、大山を連れて部屋を出て行ったあとも、星野さんは固まったままだった。

沈黙の天使がお通りになる。

さて僕も帰るか、いや待て、何か言いかけていたような……。

「なんで生きてるの？」

衝撃から回復したらしい星野さんが僕のほうを向いて言った。そうそうその話だった。

「だからそれは僕と大山の」

「それは聞いた」

「じゃあ」

何が聞きたいのか？

「私じゃなくて」

星野さんの瞳がじつと、僕に注がれる。

「君はどうして生きているの？」

病院だから当たり前なのかもしれないが一面見渡すかぎり真っ白だ。真っ白な壁、真っ白なベット、真っ白なシーツ、清潔感あふれるその部屋で、首に真っ白な包帯を巻いた星野さんが真剣な顔で言う。

「君はなんで生きてるの？」

まるで生きてはいけないような言い方だな。

「僕に死ねと？」

「そうじゃなくて……おぼれなかったの？」

「つまり、僕に死ねと？」

「そうじゃなくて……ほら、私言ったでしょ」

「結局、僕に死ねと？」

「ねえ、わざとやってない？」

星野さんが疲れたようにつぶやく。

『君はおぼれて死ぬ、間違いない』

星野さんは確かにこう言いましたね、はい。

「覚えてるよ、それで？」

「けがとかしなかった？ 病気でもいい、もしかして余命3カ月とか」

不吉な内容を淡々と。

「つまり結局のところ星野さんは僕に死んでほしいわけだ」

「だから違うって！」

今度は、怒ったような顔で星野さんがにらむ。対する僕はニヤケ顔。なんだか楽しい。でもこれ以上はまずいだろう、本気で彼女を怒らせたくはない。

僕は真面目な顔を取り出して、居住まいを正す。

「つまり、星野さんは僕が死ななかつたのがおかしいと思っているわけだ」

自分の予想が外れるわけないと、思ったわけだ。

「まるでさあ、」

僕は思ったままを口にした。

「まるで、僕の……運命、とかそんなものが、見えているみたいに見える方だよ」

星野さんが小さく尋ねる。

「もしかして、オカルトとか信じている人？」

そうだよ。

著名な霊媒師やら、祈祷師やら、占い師やら、トイレの落書きやらが口をそろえて言うことには、僕は長生きできないらしい。実際僕もそう思う。僕は死相に愛されているのだ、きっと。

だから、僕に向かってそのことを予言した著名な霊媒師やら以下略は本物なのだと思う。もちろん、そこには星野さんも含まれる。

したがって、僕は星野さんが超能力者であろうと、宇宙人であろうとびっくりしない、と思う。

「そうだよ」

僕は自信を持って答える。

そして、星野さんは僕の自信を、

「気持ち悪っ！」

打ち砕く。

星野さんのさげすみの視線が痛い。でもちょっと待てよ！

「そ、それを言うなら初対面の相手に向かって『君、死ぬよ』っていつのはどうなのさ！」

「あれは……」

星野さんが視線を泳がせる。してやったり！

「オカルト、信じてるの？ 気持ち悪っ！」

僕は星野さんにぶつけられたのと同じくらいのさげすみ光線を照射。しかし、星野さんは僕の視線を真っ向から受け止めると、それを跳ね返し睨みつけた。

「私にはね、見えるんだよ」

にらみと、ささやくような話し方に、僕はやや圧倒される。

「何が？」

「灰が」

「灰？」

「灰って言うのは比喻で、私がそう呼んでるだけ。

生きる気力を失った人の体からは灰がでる。灰は死を呼び寄せる……君は全身灰だらけ、私の経験ではもう手遅れ、いつ死んでも、というか、もう死んでないとおかしい」

一気にそれだけ言って、どうだと言わんばかりの顔で僕を睨む。

「いや、勝ち誇った顔をされても困るんだけど、つまり君はオカルトを信じているわけじゃん」

「そうだよ、でも私はあるかもわからないものを信じているんじゃない、あるってわかってるから信じてるんだよ」

「ますます気持ち悪いよ」

僕としては、ただの意趣返しのもりだった。でも

彼女の顔を見たとき、いやその一瞬くらい前から空気で気が付いていたのだが、僕は凍りついた。

人の皮をかぶった般若がそこにいた。

……怖わっ！

「最低！」

襲いかかる枕。キャッチ。

「信じるって言ったのに！ だから話したのに！」

襲いかかるリンゴ、リンゴ、バナナ。キャッチ、キャッチ、直撃。

「し、信じてるよ」

リンゴ、キャッチ。

「うそつけ、このうそつき！ 私だってこんな話したくないよ！」

「恥ずかしいよ！」

「……それはまずい！」

「ごめんなさい、ごめんなさい、もう許してください」
彼女が手に取ったのは……果物の盛り皿。

リンゴの皮をむいたと思しき包丁を手に取らなかったのは彼女の最後の理性か。

「絶対、許さない……！」

ああ、今僕の体からは灰が出ているのだろうか。星野さんから殺気がでてるもん。

とにかく誠意を示そう。

「実はかくかくしかじかでして」

僕は頭を床と平行に保ったまま自分の武勇伝を語ってあげた。その間星野さんは一言もしゃべらなかつたが彼女が聞いていることは気配で分かった。

「……というわけなのです。だから星野さんは自信を持っていいと思う」

そろーっと、僕は顔を上げる。

星野さんは、何かを考え込んでいるようだった。

ほっとした。とりあえず生命の危機は免れたようだ。でも何を考えているのだろうか、僕の処理方法とか、まさかね。

「ねえ」

「はい！」

直立不動の体勢。なんかいつの間にか僕が悪いみたいになってるな。

「私はさあ、いままでずっと受け身だったんだ」

彼女はすこし落ち着いた顔で語る。なんの話かわからないけれど傾聴。

「だから君に初めて会った時も仕方ないと思った。どうすることもできないって……。でもね、そういうのはもうやめにすることにしたんだ」

「なるほど」

テキトーな相槌。

「ほんとは今回みたいなの、おぼれてる人とか、たくさんいるんだよ。私にはそれがわかる、だから、これからはそういう人を助けようと思う。私のできる範囲で」

「立派なお考えで」

「だから手伝ってよ」

は？

「嫌なの？」

「うん」

般若再来。

「い、いや、いやさ、でもなんで僕？」

「……じゃあ、許さない。私のこと笑ったこと」

結局そこか。

僕は星野さんの般若顔を見ながら、蛇に睨まれた蛙と化す。
うなずくしかなかった。

一章 その16（後書き）

一章これにて終了。

読んでくださったかた、おられましたら感想をください。辛口の批判大歓迎。もちろん思ったことをそのまま書いてくださるだけでもうれしいです。参考にします

二章

ポケットから何かが飛び出している。

たぶんハンカチ、そのフリフリのついた白い布が足の動きに合わせて少しずつ少しずつ上昇。

あとちよつとだ！

僕は固唾をのんでその動きを目で追う。

そして、

落ちたっ！

「よしっ！」

つぶやきガッツポーズ。そのまま固まる。

前を歩いていた、知らない女の子が振り向き僕を見ていた。

しかも、おびえたように。

「あはは、あの、ハンカチ落とししましたよ」

いたたまれなくなつて、僕はハンカチを拾う動作で彼女の視線がらのがれ、顔をあげたとき、

遠くに小さくなる彼女の背中が見えた。

「不審者と間違われたんだな」

野太い声で、同じクラスの斎藤が言う。僕は学校にいるときコイツとつるむことが多い。

「……やっぱり？」

「落ち込むな。お前の気持ちは分からなくも……やっぱりわからんな。で、これが問題の物か」

フリフリハンカチ、名前入り。

「樋口、何て読むんだこれ？ けんこ？」

賢子。読めない。

「これはな、えーと確か、かしこ。そう！ かしこって読むんだっ
たと思う」

「知ってるの？」

「知らないのか？」

知らない。

「質問に質問で返すなよ。だれこの人？」

斎藤は後ろの壁を指差す。

ただの壁ではない、そこには黒板横の大きなスペースを目いっぱい使って一枚の紙が張られており、一週間ほど前から僕の秘密を赤裸々に暴露し続けている。

成績順位表。人はあの悪魔をそう呼ぶ。

「あ、あれがどうしたって？」

平常心。

「まあ、見てみるよ」

「どうだった？」

もともといかつい顔の斎藤が、今はいつも以上に悪人ずらに見える。

「……けんこがいつぱい」

「かしこだ」

成績表は全5教科と総合、合わせて6枚の紙に上から上位者順に名前を連ねているのだが、彼女の名前はすぐわかりやすいところにあった。

なぜわかりやすいところに書いてあるのに僕がそれに今まで気がつかなかったかというところには深くいわけがあるのだが、教えません。

「全教科一位だったそうだ」

おごそかな斎藤の声。

「ぐふっ」

やめろ、耳がマヒする。

「よかったなハンカチもらえて、なんか御利益があるかもしれない

ぞ

僕はハンカチを顔の前に広げる。言われてみるとフリルのところから神々しい光が出ている気がする

「そうかな？」

「知らん」

「何これ？」

突然、横から手が伸びてきて幸運のハンカチをかつさらった。

何をする！ それは僕のだぞ！

「こんな趣味があつたの？」

星野さんだつた。

彼女はハンカチをまず好奇の目で見つめ、時間の経過とともにだんだんと軽蔑の色をおび、名前を見たところで嫌悪感もあらわに言い放った。

「変態？」

「ちがう、ちがう、ちがう」

「なんで3回も言うの？」

「通常の否定にくらべ3倍の効果があります」

「どうやって盗んだの？」

「失礼な、拾ったんだよ」

「そして、気に入ったから眺めていたと。あんないやらしい目つきで」

「ちがう、ちがう、ちがう、ちがう、ちがう、ちがう」

5倍の効果。でも星野さんには通用しない。

斎藤を見る。助けてくれ。

うなづく斎藤。そして一言。

「あきらめろ」

「なんでだよ！」

「いつの間に、星野さんと仲良くなったんだ？ うらやましいぞ」

「話をそらすな！」

とんとん、と肩に指の感触。

「まだ間に合うから」

真剣な顔で星野さんが言う。

「返しにいい」

完全に犯罪者扱いだ！

二章 その2

犯罪者扱いされるいわれはないがハンカチを返すべきだという意見には賛成だった僕は、星野さんに導かれるまま樋口かしこさんの教室までやってきた。やってくるも何もそこは隣の教室で、自分の教室を出てからわずか3歩でたどり着いたのだけだ。

入口前で一旦停止、僕は星野さんに尋ねる。

「どの人が、かしこさん？」

前回かしこさんと会った時はハンカチしか見ていなかったから顔をよく覚えていないのだ。

「知らない」

「じゃあ、なんで教室を知ってるのさ？」

「なんで知らないの？ 成績表に書いてあったよ」

そんなに有名人だったのか？

僕は手前の入り口から首を伸ばし、かしこさんの姿を探す。

それほど人物なら、そう、なにかオーラのようなものをまとっているに違いない。きつと顔など知らなくてもすぐ分かるだろう。

僕は、自分の偏見をフル動員してイメージする。

かしこさんは眼鏡をかけている。

かしこさんは髪を三つ編みにしている。

かしこさんは教室の端で本を読んでいる。

本のタイトルは……”数一Aの極み”？ はっ！

ふと気がつくと、妄想でも何でもなくて、僕はとある生徒の姿を描写していた。

その生徒は僕の教室の隣、窓際一番後ろの席で眼鏡をキラリ、三つ編みをダラリ、”数一Aの極み”なるうすら寒いタイトルの本をかじりつくように読んでいるのだった。

間違いない、あれだ。

「見つけたよ星野さん、星野さん？」

星野さんは僕と同じ人物を見つめていた。目を眇めて。

「……うん？ 何？」

まるでピントを合わせるように。

「いや、いいよ」

視力でも悪いのだろうか？ まあいいや。

たぶん間違いないだろうという予想のもと、僕はかしこさん（推定）のもとへと歩み寄る。

あと机4、5個のところまで来たとき、かしこさん（たぶん）が顔を上げた。彼女の視線は僕のまま先あたりをしばらく漂ったのちゆっくりと上昇、僕と目があつた途端、急激にスピードを上げてうつむいた

なぜばつの悪そうな顔で目をそむける？ 僕は不審者ではないぞ。

僕はやや慚然としながら彼女のすぐそばまで近付き、口を開く。

「あの」

その時、

さっと僕の脇をすり抜けて、何かがかしこさん（ほぼ確定）の机にかじりついた。かしこさんが反射的に顔をあげ、その誰かがささやく。

「君、近いうちに死ぬよ」

はじまってしまった。

僕は星野さんの背中を見ながら思うのだった。

二章 その3

「その日の放課後、僕たちはストーカーになった」

僕は電信柱の陰でひとりごちる。

「違う、護衛って言ってるでしょ」

後ろから叱責。

でもなあ……。

僕は少し離れたところにいるかしこさんを見つめながら思う。

こっそりと後を付ける必要はないのではないのか、と。

昼休み、作戦会議と称して僕と大山の2人が招集された。大山はどうでもいいが、なぜ僕が呼ばれたかというと僕もその作戦に参加することが期待されているからだろう。義務ではないと思う。たぶん。

星野さんの提案はこうだ。

登校と下校時の護衛をする。以上。

とてもシンプルだけどこれを毎日やるとなると結構めんどくさいだろう。しかし嫌な予感がするな。

「もしかしてさ、僕にも同じことしてたりはしないよね」

よくよく考えれば、僕が大山にしめられていたときに星野さんがやってきたのはタイミングが良すぎたような気がする。

「してないよ」

にべない返事。ほっとすると同時にちよつと悲しい。僕なんかどうなっても構わないと言われたみたいだ。

「じゃあ、どうしてあんなところに来たんだよ」

「たまたま、忘れ物取りに戻ってみたら屋上から灰が降ってきたから」

なるほど、忘れ物のついでか……ますます悲しい。

しかし灰か……僕はずっと気になっていたことを聞いてみよう

思った。

「灰つてのは、生きる気力を失うと出てくるんだっけ？」

「たぶん」

自信なさげな言葉をどうどうとおっしゃる。

「で、僕は常に灰だらけだと」

「そう」

「でも、別に僕は生きる気力を失ってなんかいないよ」

「うーん」

軽く目をつぶって、星野さんは考え込んだ。

絶対とは言い切れないけれど、僕は生きたいと思っっていると思う。変な文だな。でも自分の考えていることだつて、100%全部丸ごと分かっている人なんていないだろうからこの表現は正しいに違いない。

長らく考えていた星野さんは、やがて目を開けると言った。

「私の知らない、他の原因があるんだと思う」

結局、星野さんは一緒に来いとは一言も言わなかった。ただ『私は毎日するから』と言い残して会議は終了。そのあとで、大山に荷物を家まで運んでくれるよう頼んでいた。大山とめちゃんの関係は今も続いており、大山は毎日星野家にお邪魔しているらしいのだ。もしかしたら、言わなくても僕が付いて行くのは当たり前前だと思っっていたのかもしれない。

一方で、僕が嫌だと言えば星野さんは何も言わなかったような気もする。その証拠に、星野さんは黙って尾行を開始した。だから僕が、ここにでかしこさんスト キングを実行しているのは全く僕の意味であつて、気まぐれだ。

もし本当に、かしこさんの身に何かが起こるのなら何とかしてあげたいし、少しだけ、僕が付いていかなかったら星野さんが悲しむような気がしたというのも理由として挙げられる。うぬぼれかもしれないけれど。

学校を出てからおよそ30分。かしこさんはマンションのエントランスに消えた。

尾行をまくためのポーズかもしれない、などとストーカー長がおっしゃったため、しばらく時間をおいてから本日のお務め終了、ミッションコンプリート。僕はDr・レオンの決めポーズを星野さんにしてあげる。無視される。

「無視しないでよ」

「何も起こらなかったね」

「無視してやる」

「今日中に何か起こると思ったんだけどな」

「さらに無視だと!?!」

驚愕する僕を無視して、星野さんはぶつぶつと何かをつぶやき始める。

無視。ぶつぶつ。

無視。ぶつぶつ。無視。ぶつぶつ。

無視。ぶつぶつ。無視。ぶつぶつ。無視。ぶつぶつ。無視。ぶつぶつ。

ぶつぶつ。無視。ぶつぶつ。無視。ぶつぶつ。無視。ぶつぶつ。無視。

ぶつぶつ。無視。ぶつぶつ。無視。ぶつぶつ。無視。ぶつぶつ。無視。

視。ぶつぶつ……あほらしくなってきた。

そつだ、僕が大人になればいいだけじゃないか。

「どうしたのさ?」

星野さんがニヤリっ! な、なんか悔しいぞ!?

「なんでもないよ」

勝ち誇った笑みを散々見せつけてから、ふと真顔になって。

「彼女はね、たぶん少し前に事故かなにかで怖い思いをしたんだと思う。」

その時灰が出て、今も残っている。だから灰だらけ。しばらく様子を見て何も起こらないようだったら、たぶん大丈夫だよ」

「ぶーん、どうして?」

「灰は死を引き寄せられるけど、なんでもかんでもじゃない。おぼれている人から灰が出たからといって、隕石が直撃したりはしないでしょ？」

樋口さんの灰がどうして出たのかは分からないけど、今日一日何も起こらなかったってことは、彼女の灰が呼び寄せる死が近くにならなからだと思っ

「……なるほど」

「帰ろうか」

コンプリートポーズで星野さんが言った。

二章 その4

「ただいま」

狭い玄関に腰をおろし、靴を脱ぐ、なかなか脱げない。

しばらく苦闘してから、脱ぎにくいのは暗くて手元がよく見えな
いせいだと気がついた。もう外は夕焼けに染まり、その赤い暗さが
僕の帰りがいつもより遅いことを物語っている。

思えばクラブ活動や習い事に無縁だった僕がこんなに遅くに帰っ
てくるのは初めてのことかもしれない。なんか達成感。でもこれが
当たり前の人だっているのだ。クラスメイトの斎藤は日が落ちるま
で柔道場で畳の上に汗を撒き散らしているのだから、僕のお父さ
んだってそうだ。帰りは早くても6時過ぎでそれから夕飯を作る…
…はっ！

突然首筋にピリツと何かが走り、これが世に言う殺気か？ など
と感心しつつ僕は振り向きまに叫ぶ。

「ただいまっ！」

目の前にお玉。

「おかえりなさい。遅かったですね」

そしてピンクのエプロンと熊さんスリッパ。

主婦ならぬ主夫、僕の父親にして最強の教師と誉れ高い男が眼鏡
をきらりとひからせ、手にしたお玉をまるでフェンシングのフルー
レのように構えていた。

まさか、その味噌っばい汁の垂れるお玉で僕を小突こうと言うの
か？ この人ならやりかねない。と僕は実父の顔を見ながら思う。

僕とは全然似ていない。

お父さんはきりつとした顔立ちのいかにも優等生然とした人で、
僕はどちらかと言えば、ほにゃつとした顔立ちのいかにもアホっば
いお母さんに似ている。

アホっぽいという表現を自分に使うのは非常に抵抗があるのだが、アホと秀才という対比があまりにも見事に僕の両親を描写するため、思わず使ってしまうのだ。

そう、お母さんは昔からアホでお父さんは昔から秀才だった。それは二人がまだ幼稚園児であったころから普遍の真理で、お母さんの話す“めるひえんらぶすとーリー”とお父さんの話す“ハードボイルド風幻想恋物語”から判断するに間違いはない。

そんな二人がどうして結婚などという過ちに至ったのかというと、

『彼女を教育しなおすことが教育者の務めだと思ったのです』 b

y お父さん

『おかーさんはあほじゃないよ』 b y お母さん

とのこと。

アホと秀才、その二人の合作である僕は - 1 + 1 が 0 であるようにきつと普通であるはずで、僕はそうであると自負しているのであるがお父さんから言うとお僕もあほで、だからお父さんの目下の目標は僕をお父さん以上の秀才にすること。

とは言っても別に勉強しろと口うるさく迫ったりはしない。

お父さん秘蔵の、教師とらの巻き曰く

「勉強は本人がやろうと思ってやるべきものである」

この恥ずかしい名前の巻物（曾曾曾曾じいさんの代から伝わるらしい）を心から崇拜している彼は口が裂けも勉強しろなどとは言えないのだ。そして僕が自分から勉強をしようなどと考えることはない。かくして僕の成績はウナギ登りの巻き戻し状態と相成った次第である。

しかし、勉強には口をはさまないお父さんであるが、

虎の巻曰く

「子どもに正しいことを教えるのが教育者の務めである」

などという文句のせいで、なにかとうるさい、とにかくうるさい。たとえばこんな風に。

「挨拶をしなくなることが非行の始まりだと言います。挨拶は必ず
しましょうね」

「……」

「返事は？」

「それは脅迫ですか？」

「いまだにお玉は僕の頭上にある。」

「違います。教育です」

「調教の間違いでは？」

「愛のある調教を教育と言います」

「愛をお玉なんかで表現しないでほしい。」

「あの、どいてくれませんか？ ほら、部屋で勉強しないといけないし、気が向いたらだけど」

「邪魔で動けない。」

「まだ話は終わっていませんよ。どうしてこんなに遅くなったのですか？ 連絡もなかったので心配しました」

「それは……」

「なんとも説明しにくい話だ。そしてこの人だけにだけは絶対に説明し
たくない話でもある。」

「……部活のようなものです」

「どうしてうそをつくのですか？」

「虎の巻曰く」

「子どもの嘘はただちに見破らなければならぬ」

お父さんに下手な嘘は通用しない。それでも嘘を付きたいと思う時があるのは万に一つの可能性を祈ってのことだ。

しかしこの辺になってくると教師の能力ではないと思う。エスパ―だ。だれがそんなことできるものかと思うところだがお父さんはできているらしい。もっとも、彼ならばたとえ空を飛べ〜とか書いてあっても出来そうだけど。

「何かあったのですか？」

お父さんは僕の目をのぞきこんだ。まさか心を読む能力まではないと信じたいが、嘘でごまかせない以上本当のことを言うしかない。実は……」

僕はうそをつかないように注意しながら、できるだけ都合の悪い所に触れないようゆっくりと話した。

隣のクラスのKさん（仮名）は悩みを抱えている。それはひとりで抱えておくにはあまりに重い悩みなのだけど、ある事情から誰にも話すことができない。そんな彼女の苦悩に、とある数奇なめぐり合わせから気が付いてしまった僕とHさん。Kさんの身を案じる僕らは彼女を励ますため、ともに下校したのであった。

「……というわけなのです」

嘘はついてない、ただ本当ではないかもしれないだけだ。

話を聞き終わると、お父さんの瞳が一瞬不思議な輝きを発した。

「まずい、ばれた!？」

「う、ごめんな……」

「感動しました」

「……え？」

お父さん涙。

「もう私は何も言いません。」

あなたがいつのまにかそんなにも大人になっていたなんて……私
は知りませんでした。いえ、知ろうとしていなかったのかもしま

せんね。私はいつまでもあなたが子どもであることを望んでいたのです。あなたが大人になることは、あなたが私のもとを離れてしまうということですから……さみしかったです。

……あなたの思うようにやりなさい。どんな結果であろう、私はあなたを責めたりしませんから」

「……」

涙を拭きながら僕に背を向けるお父さんの姿が、とてもさみしきうに見えた。

まあ、いいか。

二章 その5

「お前はもう大人か……」

自室のベットで横になつたまま、僕は天井を見つめる。

趣味もなにもない僕は、部屋にいるときよくこうしてぼんやりと物思いにふけるのだ。くだらないことしか考えない。その日あったこととか、明日あるかもしれないこととか。

今日はいろんなことがあった。

かしこさんのハンカチを拾い変態と間違われ、謝りにいったら彼女は灰だらけで、それが原因で尾行のまねごとをし、ミッションコンプリート。家に帰ったらお父さんに詰問され、ごまかし、お前はもう大人だと言われた。

僕は大人、そうかもしれないしそうでないかもしれない。

どうでもいいや……。

二人しかない家の中はとても静かで、退屈で、漫画でも読むかとベットからはい出ようとした僕の耳に、その音は大きくはつきりと聞こえた。

ぶちよつ。

何かがぶつかった音。窓のほうからだ。

でもここは二階で、当然窓も二階の高さにあるわけだから、窓に何かがぶつかったのだとしたらそれは空を飛んできたなにかであるはず。でも、ぶちよつ、って何？

僕は恐る恐る窓に近づき。カーテンを引く。

「びよい」

閉める。

見なかったことにしようとか、嫌がらせをしようとか、そういうことを考えたわけではない。体が動いてしまったのだ。意思とかに

関係なく反射的に、やばい、と感じ逃げた。

「悪い、大山」

僕はカーテンを引き、窓に手をかけ、

「びよい」

閉める。

駄目だ。体が言うことを聞かない。怖い。大山が怖い。窓一面に張り付き広がった大山が。

分からなくはないのだ。僕の部屋の窓には足をかけるようなところはない。だから普通の人間は窓に張り付いたりはできない。しかし、大山は体の表面積をぎりぎりまで増加させることで摩擦力を増やし、なんとかかへばりついているに違いない。だから窓いっぱい大山が広がって見えるのだ。

窓のほうからはガラスをこするような音が鳴り、大山の体が徐々に滑り始めているのが分かる。このままでは大山は二階の高さからまっさかさまだ。

……大山なら問題ないかも。

見捨てようと思った。でも、

「ぎよい。ぎよい」

きつと僕にしか分からないであろう、彼と戦友の契りを交わした僕にしか。

それは助けを求める声だった。急いでカーテンを引き、窓を開け、

「大山、悪い」

助けを求め伸ばされた腕を、払う。

「ぎよい」

大山の手が僕の腕に張り付く。そのまま大山は僕の体を滑るよう移動し室内へ移動した。

「本当に、悪い」

「ぎにずんな（気にすんな）」

お前はやっぱりいい奴だよ。

奇妙にねっとりとした感覚を腕に残したまま、僕が尋ねる。

「どうしたの？ こんな時間に」

「でべちゃんかびよんでる」とめちゃんが呼んでる」

「今？」

首肯。

「もし行かないと言ったら？」

「びよれがばくばくする（俺が爆発する）」

大山つて結局何なの？

口から出かかった質問をかるうじて飲み込む。大山が何者であるとも、僕の親友であることに変わりはないのだ。

「分かったよ」

どうせ暇だし。

しかし問題がひとつある。お父さん秘伝の虎の巻曰く。

「子どもの夜遊びは、未然に防がなければならない」

どのような手段をこっているかは知らないが、虎の巻にこのような記述がある以上何か仕掛けてあるに違いない。裏をかかなければ、しかしどうすれば……。

「ん？」

疑問がひとつ生じた。

「大山はどうやってここまで来たの？」

夜中に友達が遊びに来るなど、お父さんが黙って見過ごすはずもない、つまりそこが穴だ。

「なぜにぼつで（風に乗って）」

ほんとにお前は何なの？

まあいい。それで行こう。

ふわり。

重力が無くなって血が頭に上る。しかしそれは一瞬のことで、すぐにやわらかな大山の背中が僕の体重を支える。冷たい夜風を切り

ながら、僕と大山は夜空を浮遊する。

「気持ちいいっ！」

思わず声が漏れ、僕は飛び出したばかりの家に目を戻す。いつもより高い位置から眺める見慣れた風景はいつもとは違って見え、僕のテンションを底上げする。

そのテンションのまま僕は玄関に目をやった。やってしまった。

「うげ……」

お父さんがいた。

彼ならば、きっと僕を捕まえることくらい造作もないだろう。

もう無理。とめちゃんごめん……。

しかし、あっさりとおきらめた僕に向かって、お父さんは親指を立ててみせる。口が動く。

「ぐ、つ、と、ら、つ、く……」

グットラック、幸運を。

お前はもう大人だ。

突然お父さんに言われた言葉がよみがえってきて、僕は少し申し訳なくなつた。

すみません、夜遊びに行つてきます。

お父さんは、僕たちの姿が見えなくなるまでずっとそこに立っていた。

いや、本当にすみません。

二章 その6

星野さんの家に近づくにつれ、民家がまばらになり、田んぼばかりが目につくようになる。

もともと僕の住んでいるところは都会ではないけれど、この辺りは全くの田舎だ。街灯もなく、ただ月明かりだけが照らし出す田舎風景というのはかなり不気味で、知らず知らずのうちに、僕は横を歩く大山との距離を詰めていた。

「大山……とめちゃんとはどう？」

「ぎょい」

上手くいつているそうさ。それがいいことなのかは判断に困るけど。

もうすぐそこに星野さんの家が見える。そう言えば、初めてここに来た時も大山が一緒だった。そしてここで、僕たちはとめちゃんと出会った。インターホンを押しても何の反応もなく、あきらめて帰ろうとしていたとき、なんとなく視線を上げ窓に自分の顔を押し付ける妖怪を見たあの時が、僕達ととめちゃんの出会いの時であったのだ。

そんなことを考えながら僕は顔を上げ。

「ぎゃっ！」

あの時と同じように尻もちをついた。妖怪がいた。

「ひかりちゃんを待つておっつの」

いつかのように通された居間で、とめちゃんが悪びれもせず言う。昼間見たときは別格の迫力だった。寿命が3か月くらい縮んだに違いない。返せ！ 寿命を！

「……待つていた？」

勇ましいことを考えながらも口にできないのは、もちろん大山が

いるからだ。

「学校から帰ってないのよ」

ということは、僕と一緒にかしこさんの帰宅を見届けた後、彼女は家に帰らなかったのだ。

でも、

「まだ8時ですよ」

何か用事があって、帰りが遅れていると考えても無理はないのでは？

「そう、それに電話もあつたしの。用事が出来たから遅れると」

「じゃあ問題ないじゃないですか」

「本当にそう思ふのかい？」

とめちゃんが、じつと僕の目を見る。

こうして見ると、どことなく顔のつくりが星野さんに似ていて、妙に迫力があるところなんかまでそっくりだ。

「……たぶん、はい……」

しどろもどろに答える。

おそらくだけど、星野さんの居場所は見当が付いている。赤茶けたマンションのエントランスが目に見えかぶ。

でもどうしてそんなに必死になるのだろうか？

彼女は人の灰が見えるのだという。そして灰の集まるところには死があるのだという。でも、人間はそう簡単に死んだりしない。誰かが死ぬかもしれないということは、そこに大きな危険があるということなのだ。そんなところに自分から飛び込んで行ったら危ないに決まっている。

まだ彼女と過ごした時間は短すぎて、彼女がどんな人間なのか把握しきれないけれど、彼女が融通の利かないとんでもない頑固者だということは分かる。しかしそれにしただって……。

「ひかりちゃんは、学校ではどうかね？」

「はい？」

考え込んでいたせいでよく聞き取れなかった。

「ひかりちゃんと仲のいい友達はおるのかね？」

突然話が飛んだな。と思いながら僕は学校での星野さんの様子を思い浮かべる。

いない……かな？ ひとりでいる姿ばかりが思い浮かぶ。

でもクラスに一人はそういう人っているものだし、ましてや彼女は転校生。打ち解けきれていないだけとも考えられる。

「まあ、上手くやってるようですよ……まだ友達はいないみたいですが……転校してきて日も浅いですし、問題ないでしょう」

「やっぱり」

「何がですか？」

「あの子は、前の学校でも友達がいないくての」

「そういう人だっているでしょう。僕だってそんなに友達が多いほうじゃないですし」

「お前のことなど聞いとらん」

「さいですか」

「友達など要らない」と言ったそうじゃ。みんなの前で。前の学校にいたとき

「それは」

確かに問題かもしれない。

「でも、どうしてそんなことを」

「知らん」

がくつと首を落とす僕。我ながら古典的すぎだ。

「じゃが、負い目なのではないかとわしは思っておる。

わしの孫夫婦が死んでから、ひかりちゃんが他人を遠ざけるようになった。まるで自分に近づくものは不幸になるとも言うように

「どうして負い目なんか」

「知らん。ただ、孫夫婦が死んだときひかりちゃんは言ったのじゃ」

とめちゃんが、遠くを見る目つきになる。

「まるでその時のことをもう一度見たいとまで言ってしまうよ。」
「自分のせいだ」と

二章 その7

気になった。とめちゃんから聞かされた話が頭の中でぐるぐる回って回って、体もぐるぐる回って回って回って気がつくところここにいた。

かしこさんの住むマンション。その真下にあるマンションの入居者用公園。

周りを高さ50cmくらいの木製の柵が囲み、手書きの張り紙が『関係者以外立ち入り禁止』であることを教えてくれる。今はさびしいこの公園も、日中は子どもたち笑顔であふれているのだろう。微笑ましいかぎりだ。

で、その中に、そこにいるべきではない人物がいた。見つかったらどうするつもりなのだろうか、どうどうと身を隠すこともなくブランコをキコキコ揺らしているのはまぎれもなく星野さんだった。制服を着た後姿が、僕から離れたり近付いたりを繰り返す。僕に気付いた様子はない。僕はゆっくりゆっくりと近づき。

「手を挙げる。警察だ」

振り向いた星野さんのおでこに人差し指を突き刺した。バキューン。

「いたっ！」

星野さんがブランコから飛びのき額をおさえる。予想以上に深く突き刺さったようだ。指が痛い。

「不法侵入は感心できません、ぶっ」

「何すんのよ」

「こっちのセリフだよ。いてて……秘孔を……突かれた」

「お前は後30秒で死ぬ」

「わが生涯に一片の」

「何しに来たの？」

「最後まで言わせてよ」

「答えてよ」

真剣な顔で、といっても真剣な顔が彼女の標準装備のようだから、頭の中まで真剣かどうかは判断しかねるけど、星野さんが言う。

何で来たのか？ それは難しい質問だ。早く帰らないといい加減お父さんも我慢の限界かもしれないというのに、こんな時間にこんなところで僕は何をやっているのだろうか？ ついでに星野さんも何をやっているのだろうか？

「まあ……とめちゃんの」

「とめちゃんって呼ばないで、気色悪いから」

僕も最初はそう思った。でも大山はとめちゃん（どべちゃん？）と呼ぶし、呼ばないと怒るし。そのうち違和感もなくなつて、今ではすっかり慣れてしまったのだ。

「……君のおばあさんのお使いだよ。孫娘の夜遊びは感心しません。つてさ」

「なーんだ」

「なーんだとはなーんだ。星野さんこそ、こんなところで何してるのさ」

「見て分からないの？」

「分かるよ、ブランコをこいでた」

「君の、そういう人をくつたようなところ好きじゃないな。殴りたくなる」

「僕も、会話の中でさらつと『殴りたくなる』とかいう人は好きじゃないな。怖くて泣きたくなる」

「殴るよ」

「泣くよ」

「泣けば？」

「殴れば？ 嘘です、ごめんなさい」

拳を固める星野さんが怖い。

しばらくの間、彼女は僕を睨めつけていたが、ふっと視線をマンション側に戻すと、ブランコに座りなおした。隣がいているので僕も座ることにする。

「どうして、こんな夜遅くまで」

「ここに居るのかって？」

星野さんの体が、ふらふらと、前後に揺れ始める。

「言ったでしょ。護衛だよ」

僕も揺れ始める。

「でも、大丈夫って言わなかったっけ？」

「あれウソ、家の中だって危険はあるからね。私はむしろ家の中にこそ危険があると思ってる。」

それでも君に気を使っただよ。夜遅くまでつき合わせるのはいと思ってる。」

星野さんが僕に気を使ってくれるなんて感動だ。

彼女はつつけんどんだし、冷たい感じがするけど本当はいい人なのだろうと思う。つつけんどんで頑固者らしい性格が、彼女をとつきにくく思わせるだけなのだ。きつと時間が立てば本当の彼女に気がついて友達になってくれる人だっているはずだ。前の学校でだつてそうだったはずだ。

でも、『友達なんかいらぬ』と彼女は言つたらしい。それがどうしても納得いかに。そんなことを言えば反感を買うことなど分かり切つているのに彼女はそれを言つたのだ。

とめちゃんは負い目だと言つた。両親が死んだせいで、星野さんは周りと今まで通り接することができなくなつたのだと。

じゃあ僕は？ 彼女の僕に対する扱いはひどいが普通に接しているように見える。それは僕が特別なのか、彼女が変わつたのか？

たぶん、僕はそんなもろもろの疑問が気になつてここにやつてきたのだと思う。

気がつくくと、星野さんが僕のほうを見ていた。

「どうしたの？ 急に黙つちゃつて。いつもなら『君が僕に気を使つてくれるなんてカンドーだ』とか言いそうなのに」

「失礼な。そんなこと思つたけど口に出さないのが僕のやさしいところね」

「口に出してるじゃん」

「まあ、それは冗談として……考えていたんだよ」

「何を？」

「星野さんは優しいなって」

「嘘つけ」

「ひ、ひどい。」

でもじゃあ、なんでそんなに必死になるの？　なんで必死になつてかしこさんの護衛してるのさ？」

「使命感みたいなものだよ。私しかできないことだから」

『負い目』では？　言いかけて止めた。

憶測で物を言うのはよくない。デリケートな内容ならなおさらだ。代わりに違う質問をぶつけてみる。

「家の中こそ危険があるってどういうこと？」

「それはね……。たぶんなんだけど、彼女の灰が、私のよく知っている人のに似てて、だから彼女も似たようなものじゃないかと思ってね」

よく知っている人が室内で死んだのだろうか？　星野さんの両親のことが頭に浮かんだ。もしかして、星野さんは、かしこさんの姿を両親に重ねているのではないか。だからこんなに必死になつて？　僕が黙ったので、星野さんも黙った。黙ったままブランコをこぐ。星野さんは、その間じつとマンションを見上げていた。まるでかしこさんに何かあればすぐ分かれるとでも言うように。本当に分かるのかもしれない。

腕時計の針が9時を指したところで、僕は口を開く。

「そろそろ帰ろう」

「帰っていいよ。私はもう少しここにいるから」

「もうすこしってどのくらい？」

「灰が落ち着くまで」

「それって何時？」

「さあ？」

「なんじゃそりゃ」

「だから君だけ帰っていいって」

「そうはいかないよ」

僕は小さく溜息をついた。今夜は長くなりそうだ。

二章 その8

「どうした？ 机に突っ伏したりして。人生に疲れたのか？」

「うい〜」

「二日酔いか？」

「う〜ん」

「まじか」

「あ〜」

もちろん違う、寝不足だ。

「星野さんと合コンでも開いているのか？ お前と似たような状態になっているが」

「う〜す」

「うらやましい。うらやましいぞ！ 次はいつだ？ 俺も行く」

「……」

「おい」

「ぐ〜」

という会話もどきを斎藤と繰り広げたのが今朝のことだ。

昨晚。僕と星野さんはずーっとあの公園にいた。あんまりにも暇だったので、しりとりなんかもやった。5回目まではなんとなく覚えていたのだが、その後、はたして僕らはなにをやっていたのか、気がつくのと東から昇る朝日に照らされていた。あんなに朝日が目にしみるものだったとは……。

それからいったん家に帰り、朝食をとってから再びあの公園へとんぼ返り。間違えて昼間っから地上に出てきてしまったゾンビがごとき緩慢な動きでかきこさんをストキングし、学校に着くと同時に、僕は地中に還ったのであった。おやすみなさい。

で、昼休み。

「おはよう」

「いい身分だな、お前はよ」

齋藤が皮肉っぽく言う。

午前中をほとんど寝て過ごしてしまうとは確かに、一度はやってみたいと思いなながらも、僕のなけなしの良心とか道徳とかが邪魔して実行に移せなかったことだ。いい経験になった。

一方もう一人のゾンビ、星野さんかというと、授業を気力で受けきり、今は地中に還っている。

僕は彼女の様子を横目に見ながら言う。勝利感。

「どうせ授業聞いても頭に入らないしね。なら聞くより寝るほうがずっと生産的さ」

「大丈夫か？ 英語とかはいいかもしれんが、数学の高田なんかヤバそうだぞ。授業中お前のことずっと睨んでたし……」

「うっ……だ、大丈夫だよ」

あの人苦手だ。僕が分かってないのを知った上で当ててくる。陰湿だ。

「ところでよ、昨日何があったんだ？ まさか本当に合コンか？」

「ふっ……」

軽く笑って見せる。そして席を立つ。

「ま、まさかお前……！ そしてどこへ行く？」

「ほかのメンバーのところへさ」

啞然とする齋藤の顔を思い出し、ひとりニヤニヤしながら僕がやってきたのは隣の教室だ。

こんな生活を続ければ確実に体を壊す。僕ではない、星野さんが。彼女は真面目のようだから授業中に眠るなんてことはしないだろうし、寝不足で倒れるまで頑張るに違いない。ストーカーが過労死なんてギャグにしかない。僕は爆笑するだろうけど。

僕は教室の中を覗き込む。
いた。

かしこさんは昨日と同じように端っこの席で参考書を読みながらひとり弁当を食べている。その姿が星野さんに重なって、あわれ、今度一緒に食べてあげようかなんて考えた。

星野さん曰く、灰は特定の死を呼び寄せられるらしい。それが本当に室内での危険を招くものなのか、確かめようと思うのだ。そうでなければ星野さんが一晩中あそこに張っておく必要はないのだから。

僕は相手を警戒させないようにゆっくりと近付いて行った。

ふむ、今日の本は英語か？ タイトルも英語だからなんて書いてあるのか読めないけど。

あっ！ 気付かれた！

「どうも、こんにちわ」

にっこり笑ってみる。

「……」

おびえた顔で凝視される。もう一度。

「こ、こんにちわ……」

「……こんにちわ」

よし！ コンタクトに成功したぞ！ うつむいちゃったけど。

「え〜と、何読んでるの？」

「……単語帳」

「面白い？」

「……はい」

「うっそだ〜」

「……」

「……」

どうしよう？ 話すことがない。いきなり『近頃ケガとかしませんでした？』なんて聞くのはヘンだし……と話題を探し、ふと気になっただけ聞いた。

「リストバンド好きなの？」

この前もつけていた。眼鏡に三つ編みという全体的に古風なスタイルのなかで、白く細い手首にまかれた真っ白なリストバンドが浮

いて見えたのだ。

なんていうことのない質問に、しかし、彼女は大げさに肩を震わせた。いつそう深く下を向く。

「ああ、ごめん……大丈夫、似合ってるよ」

「……」

「僕も好きだよ、リストバンド。なんかナウいよね？」

「……」

無視。完全に。

どうしようかと途方に暮れていたら、突然、襟首を掴まれた。

「お目覚めですか？ 社長閣下？」

「た、高田！？ 数学の亡霊がなぜここに？」

「自分の成績がいくら悪いからって、よりもよって樋口の勉強を邪魔しようとはいい度胸だな？ え？」

「いえいえ、誤解です、僕はただ」

「樋口はな、勉強で忙しいんだ。お前なんかにかまっている暇はないんだ。そつだよな樋口」

「……」

「ほらみる」

「いや、ほらみるって、無視されてるじゃないですか！ それに、」

僕のお父さんは教師だ、それも超ド級の。その彼から、僕は教師のあるべき姿について幾度となく教え込まれてきた。だからだろう、僕が言わなくてもいいことまで言ってしまったのは。

「昼休みは自由時間ですよ。勉強する時間じゃない。いくら自分の教え子の成績が上がれば給料が上がるからって、昼休みにまで介入しないでください」

ピシリ、と高田先生のこめかみに緑豊かな山脈が生まれた。おお

っ！ 地殻変動！

「いい度胸だ。来い、生徒指導室だ」

「う、嘘です、ごめんなさい！」

「問答無用！」

惚けた顔で見送るかしこさんに、僕は小さく手を振った。
気分は戦地に旅立つ前日の青年特攻隊。もうやけくそだ。

二章 その9

放課後。

僕は、かしこさんの背中ではびよこびよこ跳ねる三つ編みを見ながらつぶやいた。

「……………引つ張りたい……………」

「同感」

星野さんの瞳に獰猛な光が宿る。たぶん彼女にはいじめっ子気質があると思う。

「じゃあ、引つ張ってこよう」

同意も得られたことだと、身を隠していた電柱から飛び出しかけた僕の襟首を、星野さんが掴む。

「駄目」

「なんで？」

っていうかなんで僕たち身を隠してるの？ スト…護衛ならばそばにいたほうがいいんじゃない？」

僕のもっともな疑問に、星野さんは唇をかむ。そのまま唸る。放課後もしっかり授業に参加していた彼女の瞳はすこし充血していて、唸り声も相まって飢えた獣のようだ。

しばらく唸った後、その紅い瞳がこっちを向く。

「行ってくれば？ 私は遠くから見てるから」
なぜ僕だけ？

許可も下りたことだし、肉食獣に食われたくないしで、僕はかしこさんにひっそりと近づいた。

僕に気配を消す能力があったのか、それともかしこさんが鈍いのか、僕が真後ろに来ててもかしこさんは振り向かなかった。

なんとという据え膳、せつかくなので肩をたたく代わりに三つ編みをひっぱることにする。

「てい！」

「ひゃあー！」

快感！

でもかしこさんは涙目で僕を睨んでいて、考えてみれば僕と彼女は特別親しい関係というわけではなく、そんな人間がいきなり三つ編みを引つ張るのは失礼だ。

「ごめんなさい」

「……」

かしこさんは無言で歩き始める。これは許してくれたということ
でいいのかな？

ためらいがちに声をかける。

「あの、かしこさん？」

「……名前で呼ばないでください。嫌いなので」

「ええっ！ そんなにはつきりと言われたら傷つくなあ……。まあ、確かにいきなり下の名前で呼んでしまったのは馴れ馴れしかったかもしれないけど、でもそれは君の名前が珍しいからであって」

「私が嫌いなのはあなたではなく私の名前です」

「あつ、すみません……」

そんなは無表情に指摘しないでほしい、とても恥ずかしい。

……いやもしかして、そこまで分かってての犯行か？ 真面目な振りして本当は性悪女なのか？ などと妄想しつつ、気にしてないふりができる強い自分に酔ってみる。笑顔でさわやかに謝る。

「昼休みはごめんね。いきなり押し掛けたりして」

「……いえ」

「今度は話す内容考えてきたから」

僕はポケットからノートの切り端を取り出した。午後の授業中ずつと考えていたのだ。

全部で十項目の走り書きに目を通し、一番当たり障りのないやつから順番に、

まず“天気”

「今日はいいい天気だね」

次に“学校”

「学校は楽しいね」

次に、

「あの……なにが言いたいんですか？」

「だね、僕は何が言いたいんだろっね」

この紙を書いたときはばっちりだと思ったのだけど、なぜだろう
会話が弾まない。

そのまましばらく無言が続く。気まずい、何か言わなければ、と
足りない頭をフル回転させていると、足りてる頭の彼女が沈黙を破
った。

「……どこまで付いてくるんですか？ 何か用があるんですか？」

今までに比べてはつきりとした発言。これは怒っているのだろうか、
もしかして。星野さんみたいに怒っているときは怒っている表
情をして欲しい、こういうタイプは苦手だ。

確かに、いきなり三つ編み引つ張ったりわけのわからないことを
口走ったりで、彼女から見た僕は相当ウザい奴なんだろうと思う。
でもここで引き下がるわけにはいかないのだ。

「いや、実はね」

何て言おうか？ かしこさんが僕の発言に耳を傾けているのが分
かる。

ああ、もうめんどくさいっ！

「実は、かしこさんが最近元気ないな」と思っ

びくっ、と彼女の肩が震えた気がした。

「……どうしてそう思うんですか？ 私はあなたと接点はなかった
のに、私はあなたの名前すら知らないのに、どうして私のことが分
かるんですか？」

「うっん、それには答えられないんだけど……」

僕はかしこさんの反応を確かめながら、意図的に話を変える。

「ところでさ、最近ケガとかしなかった？」

突然、かしこさんが立ち止まった。僕は余計に一步進んでから振り向く。

「どうしたの？」

うつむく彼女の表情は読めない。しかし……。

「……失礼します」

彼女が横を走り抜けるとき、三つ編みが踊るように僕の顔をたたいていった。

二章 その10

初めから、何かがおかしかった。

マンシヨン下の公園。昨日と同じようにブランコをキ コ キ
コ させていた星野さんは、遅れて合流した僕を見るなり目端をつ
り上げ、キツと睨んだのだ。

いや睨むだけなら何も珍しいことではない、いままで何度睨まれ
たか分からないくらい睨まれているから、いまさらその回数が多少
増えるくらいどうということはないのだけれど、しかし今度のはな
んというか……侮蔑？ 最低の男を見るみたいなさんな目で、さす
がの僕も少し傷ついた。なのでその心境を訴えてみる。

「心が痛いです……」
睨まれる。

ぶつぶつとつぶやく。軽薄とか聞こえた気がする。

「軽薄？ どこが？」

本当に分からない。かしこさんとのやり取りの中に軽薄な何かが
あったろうか？ というかあったとして、星野さんに聞こえたのか
？ 彼女がどのくらいの距離に隠れていたかわからないけど、僕も
かしこさんもそんなに大きな声で話していた記憶はないぞ……。と
まで考えてピーンと来た。星野さんは聞いていたのではない、見て
いたのだ。つまり、

「なるほど、僕が星野さんを差し置いて、三つ編みを引つ張って
しまったから、それで拗ねてるんだ」

僕はニヤリと笑う。そして星野さんを見る。無表情。僕を無視す
る作戦のようだが僕には分かるぞ、これは凶星をつかれて返答でき
ないでいるのだ。

「ふふふ」

あまりの微笑ましさに笑いがこみあげてきた。

そうだ、笑おう。大声で高らかに！

「あつははははは……ひっ！」

キラリ

閃光がひらめき、僕は凍りついた。

なめていたのだと思う。出会ってからわずか一週間、たったそれだけの間にいつたい何回睨まれたことか。よくよく考えれば彼女と初めて出会った日、『君死ぬよ』と爆弾発言をした彼女の顔も睨んでいたような気がする。だから、僕はもう慣れたつもりでいたのだ。星野さんの睨みつけ攻撃など僕にはもう効かない、と。

でも、僕は間違っていた。充血した瞳は血の色とは思えない毒々しい蛍光色の光を発し、光の当たる部分、僕の顔は心なしに熱い、いや痛い。ちくちくと毒のような痛みがだんだんと広がって行くよう。そして、恐怖。眼だけでこれほどの感情が伝えられるものなのか？ 怨念のパワーが星野さんの背中から広がり、空間を埋め尽くし、やがて僕の全身を取り込む……だめだ言葉で表せない。とにかく怖い。

ガバツ、と星野さんが立ち上がり、僕は反射的に身を引く。

「ほほほほほ、星野さん、どうかお気を確かに……」

へっぴり腰で懇願、いや哀願。

「……れ」

「え？」

「……えれ」

「すみません。もうちょーっと大きな声でお願いできますか……」

僕のお願いを、心やさしき星野さんは聞き入れてくれた。

彼女は大きく大きく、腰がのけぞるほど息を吸い込んで、それから世界中のみなさんへ届けとばかりにさげんだ。

「帰れ

っ……」

二章 その11

僕は走った。

進行方向はるか彼方には沈みかけた太陽が赤々と輝いていて、太陽に向かって走るだなんて、安っぽい青春ドラマのラストシーンみたいだ。しかし、それでは安っぽい青春ドラマのラストシーンとはいっただんなものなのか？ やっぱりラストは夕日に向かって走るのが一番おさまりがいいのかもしれない。

明日への希望にあふれた少年少女たちの笑顔を思い浮かべて、ふと、中身のない空っぽのカバンがパタパタと背中中で跳ねまわり、邪魔なことに気づく。僕は教科書のほとんどを学校においていて、だからこのカバンは飾りでしかなく、お父さんがうるさくなければ持つていく必要のないもののだが、普段はあんまり邪魔だとは思ったことがない。そもそも何でこいつは跳ねているのか？ ああ、僕が走っているからだ。僕は走るのをやめた。

すると、先ほどのことが思い出される。

星野さんの憎しみをこめたまなざしや、『帰れ』という言葉が、たった今聞いたかのようにリフレインされ、なるほど僕は自分が怒っているのだと気がついた。僕はボランティアだ。ちょっと正義感を感じ、星野さんに付き合っていたにすぎない。そう、『負い目』だとか『使命感』だとか、そんなものは僕にはない、僕にあるのは知り合いのよしみで星野さんに付き合っただけといううちよつとした気まぐれ、あとかしこさんが心配だというのもある。僕は星野さんの部下でも下僕でもなく善意の協力者であり、僕のほうから辞表を提出したことそあれ、星野さんから一方的に解雇されるいわれはない。

頭の中で言葉を連ねるにつれ気持ちが整理され、僕は不可解なモヤモヤの原因を突き止めた。

結論、星野さんは理不尽だ。

家に着いた。時刻はこの前、お父さんとお玉フェンシングをしたときと同じくらいか。

「ただいまっ！」

僕だつて学習能力はあるのだ。廊下の向こうからエリート顔を、にゅ、っと突き出していたお父さんは満足げにうなずき。

「元気でよろしい、何があつたのですか？」

やはりお玉を構えて近付いてきた。しかも『何があつたか？』とは、やはり彼はエスパーなのだろうか？ いやそんなことはさすがに、ないとも言い切れないところがなんと、しかし、誘導尋問の可能性もある。僕は慎重に言葉を選ぶ。

「何かつて？」

「何か……感情の高ぶるようなことがあつたのではないですか。たとえば嫌なことか」

脱力。絶対心を読まれているに違いない。

「どうしてそんな……」

「いつもより声が大きかったですよ」

それだけ……？ しかもそんな大きくなかつたような……いつもよりつて何デジベルくらい？

「さあ、お父さんに相談するのです」

笑顔で両手を広げるお父さんをみて、僕は悟つた。逃げ場はない、と。

「ふむ、つまり『帰れ』と言われて腹が立つたから帰ってきたと……」

僕はだいぶ端折つて説明した。つもりなのだが、お父さんは足りない情報を頭の中で補完し、全体像をつかんでしまったようだ。眼鏡をひからせ、じーっと僕を見る。子どもの頃の刷り込みか、僕はこうやつてお父さんに見つめられると怒られているような気持ちになるのだが、お父さんは突然、優しく微笑んだ。

「そうですか。あなたも、もうそんな年頃なのですね……」

「はあ」

しみじみと言われても、何の事だか。

「私は答えを与えたりはしません。ですがヒントを上げましょう」
教師のような口調、何もかもを見透かしたような顔、多感な年ごろの僕はちよつと力チンときながら、でもヒントは欲しくて待つ。

「どうして彼女は怒ったのだと思いますか？」

ヒントなのに質問？

「え〜と、さあ？」

三つ編みのくだりは、諸事情により省略した。

「考えてみましたか？ 安易な解答に至ってはいませんか？ Hさんというのは理由もなく怒るものなのですか？」

「……」

「あなたの視点だけでなく、他人の視点に立つてみることは大切です。」

大人でさえ、いえ年齢云々ではありません、私の認める大人でさえ、時には、特に感情が高ぶっているときは判断を誤ります。自分以外の目で周りを見ることができなくなるのです。私だってそうですよ。理不尽な態度をとられれば怒ってしまうのも仕方ありません。しかし、理不尽な態度をとった彼女はそうするしかない理由があったのかもしれないし、理由を知ってしまえば本当にくだらないことで、あなたが怒るのも仕方ないかもしれない。その理由を完全に理解することは不可能なのでしょうが、理解しようとすることは大切です。」

それが私のヒントです。夕飯でも食べながら考えるといいでしょう」

二章 その12

お父さんに何も言われなくとも、たぶん僕は星野さんのところへ行つたろうと思う。この辺はそんなに治安の悪いところではないし、不良少年グループがうるついでるなんてことも、変質者が出たなんてことも、たぶんない、強いてあげるとすれば警官に補導されなにかが心配だが、まあそのくらいならかわいものだ。でもやっぱり女の子がひとり屋外で夜を明かすというのは危ないし、僕は星野さんを見捨てるほど薄情ではない。おそらく、かしこさんを見張る星野さんを、こつそりと後ろから見守るくらいのはしたのではなにかと思う。見張ってるつもりが見張られているわけだ、

……ん？

僕は勢いよく後ろを振り向く。かしこさんを見張る星野さんを見張る僕を見張るものお父さん、という構図が頭に浮かんだのだが、幸いにしてそこに広がるのはただの闇だった。本当に？ 目を凝らすが見えぬものは見えない。もっとも、お父さんが本気で身を隠していれば、僕なんかでは見つけることはできないだろう。まったくなんなんだ、あの人は。

お父さんは、僕が食事を終えて、すぐ出かける準備を始めるのを、まるでそうなることは分かっていたような顔で見ながら、今晚は雨が降りますとか言つて傘を手渡した。何もかも見透かされているように、でもきつと、僕が本当に困つた時、最後に頼るのはお父さんなんだろうと思う。そしてお父さんは助けてくれるのだ。やっぱりまだ子どもですね、あなたは、とか言いながら。星野さんがなんであんなに怒つたのかは分からないけれど、きつと僕も悪かつたのだろう。何が悪かつたのか分からないから謝りようがないけど、まあ、僕が謝ればすべてまるく収まる。なら謝るのが大人というものだ。

公園、いつものブランコに星野さんの姿はなかった。

帰ってしまったのかな？ それならそれで、僕も安心して家に帰れるというものなのだが、いや、しかし、星野さんの性格からいって、途中で投げ出すようなことはしないだろう、ということは一時的にどこかへ行っているのか、トイレとか食事とか、さすがにずっとここに居るわけにはいかないだろう。

と、ベンチが目についた。僕からは背もたれの側しか見えず、あそこに寝っ転がっていたら見えないだろうな、なんて考えながら覗き込んで、

で、いた。寝てる。

なにか夢でも見ているのか、眠っているというのにしかめっ面だ。しかし、こうやって無防備な寝顔を見せられると何かいたずらしたくなってくるのが僕というもので（ヘンな意味ではない。僕にそんな度胸はない）、いい具合に近くにはボールペンが落ちている。一緒に教科書も落ちてるから、眠る前は勉強でもしていたのかもしれない。そんなことをすれば眠くなるにきまつてるのに、つくづく真面目な人だ。

さて、落書き落書きと、

「……」

ボールペンを拾ってから、止めた。寝かせといてあげよう。

どうして教科書と言うのはこんなにも面白くないのだろうか？

だいたい名前からしてよくない。“現代国語”だなんて、いや、国語について書かれた本なのだということは分かるから名前の目的は十分果たしていて、それどころか無駄のない素晴らしいネーミングだと思っただが、しかしもっとインパクトを大切にすべきだ。最近本屋でよく見かけるようになった“萌える”みたいなのはさすがにないにしても、“誰でもわかる”くらいの名称にすべきだと思う。そうすれば、きつと教科書を手にしたその瞬間ぐらいは目を通そうという気持ちになるだろう。そのあとのことは知らない。

星野さんはなかなか起きない。暇だ。あまりの暇さに、ついに僕は教科書を開いたのだった。もしかしたら、無人島に漂流するときには教科書だけしかもっていかなかったら、僕はすごく成績が良くなるのではないか、そんな妄想はしかし妄想で、チンプンカンプン、数学の教科書は宇宙語で、歴史の教科書は怪電波、読めるのは国語だけだ。無人島では燃料として有効活用されることだろう。それにしても暇だ。そして眠い。でも星野さんは寝てるし、僕まで寝てしまつたら何のためにここにいるのか分からない。

「……さい」

ん？

声が出た。方向は星野さんのほうからで、そつちには星野さんしかおらず、星野さんでなかったら幽霊の声だ、それは怖い。

「……寝言？」

僕はゆっくりと星野さんに近づく。星野さんは僕に背を向けているので顔は見えない。起きているかは分からない。でも、起きたらもっと別のリアクションをとるだろうからきつと寝言だ。しかし、『さい』とはなんぞ？

覗き込む。やっぱり寝てる。僕は相手が寝ているのをいいことにずいぶん長いこと、星野さんの寝顔を見ていた。そして気付いた。これはしかめっ面じゃない。これは……。

音を出さず、星野さんの口が動く。

「い、め、ん、な、さい。」

二章 その13

「ごめんなさい。誰に？ 分からない。でもとりあえず試してみる。
「いえいえ、お気になさらずに」

パチッ。

「うおおおお！」

何の前触れもなく、まるでスリープモードに入っていたロボットが時間が来たので再起動したくらいの唐突さで、星野さんの目が開かれる。僕はびつくりして電流が走ったみたいのにけぞった。

「びつくりしたあー」

「ここはどこ？ 私はだーれ？」

星野さんが古典的なギャグに走る。いや、寝ぼけているだけか？ 寝起きだというのに瞳はきっかり10分咲き。とても寝ぼけているようには見えないが、

星野さんはしばらくきよろきよろした後、僕を見ると、近付いてくる人間を見て警戒する猫みたいに凍りつき凝視した。やっぱり寝ぼけていたのかもしれない。

「え〜と。ごめんなさい」

星野さん解凍。

「な、なんであやまるの？」

「う〜ん。それを言われると困っちゃうんだけどね、分からないから。でも、星野さんが怒る理由が僕以外に思いつかなかったからさ、僕が悪いんだろうな〜って」

僕はあらかじめ考えておいた答えを言う。出来合いの言葉、なぜかむなし。

「バカみたい、そんなのわかんないじゃん。私がただむしゃくしゃして、君に八つ当たりしたただけかもよ」

「そっなの？」

「……そっだよ」

「嘘つきは泥棒の始まりです」

「なっ！　なんで分かったの!？」

なんでもくそも、リアクションが嘘っぽすぎる。返事するまでにずいぶん間があったし目線までそらした。しかし一つ学んだな、自分では完璧にごまかしたつもりでも周りから見るとばれればれということとは結構あるのかもしれない。今度お父さんに嘘をつく時の参考にしよう。ポイントは即答、凝視、だ。

嘘を見破られた星野さんは赤面してうつむいている。なんか微笑ましい。

「星野さん」

「ちよ、ちよっと待って。今言うから、私が怒ったのはつまり」

「いや、別に無理して言わなくても」

「ふざけないで。一方的に謝られて、それからそんなこと言われて、私は何も言わなかったらまるで私が負けたみたいじゃない」

「じゃあ、謝れば？　それでチャラってことで」

「謝るのはもつと嫌。謝るってことは負けを認めるってことだよ」

「めんどくさいよ」

「うるさい」

「なんだと」

少スキつい言い方になってしまったようだ。星野さんの体に緊張が走るのを見て取れた。温厚で通っている僕も、さすがに今回は少し気が立っているのかもしれない。

「これ以上嘘をつかなくていい。僕はなんで君が怒ったかなんてもう気にしない、忘れる。これでおしまいだ」

「……うん」

不服のようだ。しかしそれでも妥協したのは少しなりとも僕のいらだちに気が付いているからだろう。少し気まずくなる。気まずさをごまかすために笑顔で提案。

「じゃあさ。ほかのことを教えてよ。星野さんにとって、何か恥ずかしいこととかさ、昔のちよっとした失敗話とかでいいから」

「……そんなのでいいの？」

「うん」

僕はまだ笑顔。ちょっとやりすぎかも。もつとナチュラルに行こうと顔をもんで修正、自然な笑顔になった、はず。

「じゃあね」

「うん」

「天国の話しよう」

「はあ？」

僕の反応に、星野さんは一瞬目をつり上げかけ、戻す。

「恥ずかしい話だよ。私を笑うといい。罰ゲームみたいなものだし、笑っても怒らないから」

「わかった。わははははははははははははははははは……ごめん続けて」
からかっているのに相手が怒ってくれないというのはむなしいなものだ。

星野さんはすごく真面目な顔をしている。彼女は真面目だ。だから今から話してくれることは、本当の本当に彼女にとって恥ずかしいことなんだと思う。心して聞こう。

「数年前のことなんだけど、

一回だけ車にはねられたことがあったんだ。どんな車だったのか全然覚えていないんだけどね、そいつがすごいスピード違反をしていたらしくて、はねられた私は、そばで見えていた人の話によると10mくらい飛ばされたんだって。まあ、見た人もショックだったろうから多少の誇張は入っているかもしれないけれど。

それで病院に運び込まれたわけなんだけど、その時には呼吸も心臓も止まっただけでもうお手上げ状態。医者から最悪の場合を想定しとけって言われたらしい。奇跡的に、って言葉はあんまり好きじゃないんだけど、私が助かったのは本当に奇跡で、それでも危篤状態3ヶ月間寝たきりだった。

それで、その3ヶ月間。私は夢を見ていたんだ。天国にいる夢。

その天国っていうのが、今思い出しても恥ずかしいな。お花畑なんだ。私は花にはあんまり詳しくないからそこに生えていたのがなんという花なのかは、ほとんどわからなかったけど、世界中の花々をすべて集めてきたんじゃないかってくらいいろいろな花があって、すごくきれいだった。あんまりにもきれいだったから、ああ、ここは死後の世界なんだなって、納得しちゃったもん。

でもさ、いつくらきれいだからって、花ばかりみたら飽きるんだよね。もしかしたらそうじゃない人もいるのかもしれないけど、私は飽きた。たぶん10分くらいでどうでもよくなって、帰りたくなった。お父さんたちも心配しているだろうって思ったしね。で、とりあえず歩いてみることにした。見渡す限り、地平線の向こうまで花ばかりでね、げんなりしたんだけど、他にすることもなかったから延々と歩いた。不思議と疲れは感じなかったな。夢の中だから当たり前かもしれないけど。でも、いくら歩いても何も変わらななんだよね。最初はきれいだと思っていた花もだんだんと疎ましくなってきた、最後のほうは力一杯踏みながら歩いた。そう、最後があっただ。

いきなりだよ。いきなり地面が無くなっていったんだ。あそこが天国の端っこだったんだらうね。で、地面がなくて何があったかっていうと、これまた笑っちゃうんだけど、そこは雲の上だったんだ。だから下には地上が、私の住んでた町が見えていた。

すごかったよ。すごく汚かった。町は一面灰に覆われていてね。そうだな、微生物の写真集みたいな見たことある？ あのエグイやつ。感覚としてはあんな感じ。生理的に受け付けないっていうのかな？ 見た瞬間から触りたくない、近づきたくないって思った。だから私はもう見るのをやめようって思った。私の後ろには灰なんて少しもない、きれいなお花畑が広がっていたからね、そつちを見ようって思った。

でもね、そうする前に見えたんだ。何で見えたんだらうね？ 見えるはずなんてないのに、私が見えたんだ。病院のベットベ横にな

る私が。天井があるはずだし、そもそも私の視力で雲の上から地上のことが見えるはずなんてないのに、はつきりと、まるで顕微鏡でも覗くように見えた。そしてあのエグイ微生物みたいに私は汚かった。誰よりも灰だらけ。皮肉な話だよ、汚い汚いと、周りのものに向かって散々言っておきながら、実は一番汚かったのは私だったんだ。

私のベットの横にはお父さんとお母さんがいた。二人とも私の手を握ってね、ずっと話しかけてるんだ。私の手、汚いのに。ずっとだよ。しかも、あの汚い灰はね、つないだ手を伝ってお父さんとお母さんも覆い隠そうとするんだ。少しずつ少しずつ、私から離れて、お父さんたちのほうへ。ゆっくりとゆっくりと伝わって………伝わって

「もついいよ」

「最後は」

「星野さん！」

「……うん」

聞かなきゃよかった。というのが正直な感想。僕は日々を、ゆる／＼、かる／＼、てきとーに生きていきたいのだ。なのに星野さんの話ときたら恥ずかしい話を通り越してシリアス。肩が凝ってしまった。でも、星野さんが何で僕にそんな話をしたかと言えば原因は僕にあるわけで、僕が柄にもなく腹を立ててあんな提案をしたからなのだ。星野さんは真剣に、謝らずにキャラにすることができるとな話を選んだのだろう。本気で。

もつと気楽でいいのに、僕なんかのために本気になる必要なんてきつとない。だって僕が本気じゃないから。僕は過ぎてしまったことを、全てことごとくギャグにしてしまいたがるような人間で、ろくでなしなのだから。

星野さんがはなし終わったら、僕は爆笑するつもりでいた。些細なことでもいい、気まづくなった雰囲気壊してしまえるような、くだらない話をして欲しかった。そうすれば僕がそれを思いつきりからかって、星野さんを怒らせて、それでおしまい。何にもなかったように笑って、全部忘れることができたのに、なんだこの雰囲気は、全然笑えないぞ。

いきなり、それまでうつむいていた星野さんがこちらを向いた。

「なんて顔してんの？」

いえ、あなたこそ。てつきりこのまま泣きだすのかと思いましたよ。なんて言えない。

「夢の話だよ。私の妄想、だから笑ってよ」

そういつてニツと笑う星野さんの顔には一点の曇りもなく、本物の笑顔に見える。見える。

「笑ってよ、そうじゃなきゃキャラにならないじゃん」

星野さんはさっきの話を冗談にしたいのだ。僕もできればそうしたい。星野さんのことを全くしらなかつたころの僕ならそうしたろ

う、では今の僕は？

「ふふ、バカな夢だね」

「そうでしょー」

僕は真剣にはなれなかった。でも、笑いながら思う、これでいいのかもしれない。星野さんのためにも、なんていうのは都合のいい方便なのかもしれないけど。

「くだらない話でいいとは言ったけど、まさか夢落ちとはね」

「バカにしないでよ。これは私の自信作なんだから」

「自信作って……夢を作れるの？ 意図的に？ うちやましい。そんなことができるなら僕は一日中眠りたいな」

「それでどんな夢を見るの？」

「うーん。眠ってる夢かな、夢の中で寝るって、気持よさそうじゃない？」

「それじゃあ夢を作れる意味ないじゃん」

「確かに」

アハハハハハハハハハハ！ くだらないことで笑いあう。それをどこか他人事のように見ている自分がいた。

「ところでさ、なんで傘なんて持つてるの？」

星野さんが、お父さんに渡された傘を指差して言う。濃いグリーンのかなな傘だ。

「ああ、お父さんが持って行ってさ、雨が降るらしいよ」

「へえ、気のきいたお父さんだね、でもさ」

いきなり笑顔を引っ込める星野さん。

「なんで一本しかないの？」

雨が降り出した。

「ああ、もう！ だからなんで一本なの！？ 私のことを忘れてたの？ それとも狙ってやったの？ そんなに私と相合傘したかったの！？」

濡れた髪を犬のように震わせて、雨を飛ばす。僕にかかる。わざ

とか。

僕たちはマンションのエントランスに退避しようとして、現代文明の利器によつてその道を閉ざされていた。暗証番号を知らないと入れないらしい、なんとというハイテク！一応屋根はあるが足元は水浸しだ。中に入りたい。

想定すべき事態ではあつた。というか当たり前である。いまどき誰でも侵入可能なマンションがはたして存在するのか？存在するとしたらマンションの名をかたる偽物、分不相応に名前に、なんとらマンションとか入っているアパートくらいのもだろう。

ロックされた扉の前で、僕らは立ち尽くす。黒々と姿を隠すこともなくさらしている防犯カメラの視線が痛い。強い雨だし、時間がたてばおさまりそうではあるが、はたしてそれと僕らが管理人さんに追い出されるのとどちらが先だろうか？

「一つ疑問があるんだけど」

「前置きはいらさないから早く言つて」

なんか八つ当たり気味。

「かしこさんになにかあつたとして、どうやってマンションに入るつもりだつたの？」

「ふぐつ……」

「なんだ、星野さんも想定していなかつたわけだ」

「管理人さんに言えば……」

「なんて言つたのさ」

「……確かに」

結局ずさんな計画だつたわけだ。僕は疲れた表情で雨を見る。ああ、どうやって帰ろう。

「ちょっと、なに悲劇の主人公みたいな顔してんの？雨は私のせいじゃないでしょ」

「似たようなもんさ」

「どういう意味」

「たぶん思つてる通りの意味さ」

「このっ！ なめた口を二度ときけないように、して、やる、うりや！ どうだ！」

「いたっ！ いはいへす！ やめてくはい！」

僕がどういうことになっているかは割愛するとして、ようやくもとに戻った霧囲気に、僕はホツとしていた。シリアスで湿っぽい霧囲気は嫌いだ。例え割愛せざるを得ない状態にされたとしても、じめじめしてるよりはずっといい。空気はじめてるけど。

そんなこんなで、僕はちよっとはしゃいでいたのかもしれない。声も大きかったと思う。でもよく考えれば僕らは不審者で、もっと背後に気を配っておくべきだった。

「すみません。うるさいんですが」

怒ってるな、これは。

でも幸いにして、それはかしこさんの声だった。

「どうぞ」

そう言って、かしこさんはマンションの中に僕らを招き入れた。ようやく乾いた空気と地面を手に入れた僕らは彼女に礼を言う
「どうも」

べきだと思うのだが、言ったのは僕だけで星野さんは不自然なほどかしこさんから距離をとって無言。失礼なやつだ。僕は星野さんの無礼を帳消しにするくらいの礼儀正しさで感謝の言葉を述べる。

「突然の雨で、雨宿りできる場所を探していたんだけど助かったよ」
「大きな声でしゃべらないください。響くので、住人の皆さんに迷惑です」

怒られた。ぼそぼそ声をつつむき加減で言うからなんて言ってるのか聞き取りづらいし込められた感情も分かりづらいが、たぶん怒っているのだろう。

「す、すみません」

しゅんとする。小さいころからの癖で、怒られると委縮してしまふ。僕が不良だったわけではなく、怒られる基準が普通の家よりも低いのだ、家は。些細なことで怒られる。

しかし、困ったことにこの場でまともなコミュニケーションを行うおうと思っているのは、どうやら僕だけで、かしこさんは生まれつきか知らないがいつも無口で、星野さんはかしこさんを避けているようで、話かけたりしそうには思えない、だから僕が黙ることはその場の沈黙を意味しており、僕はそんな気まずい場所が苦手だ。

話題を探し、苦肉の策として一言。

「トイレって、どこですか？」

結論を言うと、ない。ということになるのだろう。このマンションは住人以外を招き入れることを想定されておらずウンヌン、トイレ

レの管理には人件費がかかりそんなことをすれば部屋代を上げざるを得ないカンヌンをぼそぼそと呟いていたが、無駄な部分を端折ると、ないのだつまり。

なぜ、かしこさんがトイレのない理由を熱弁したのか分からず、僕は困ってしまったのだが、僕が沈黙するとかしこさんはまるで一大決心をするように僕を見上げ。こうおっしゃった。

「ついてきて」

で、連れてこられたのが202号室、表札はなし。場所は僕と星野さんが大騒ぎしていた場所の真上、なるほどこんなところに住んでいればうるさいだろう。

僕は部屋の前まで来て、かしこさんがなぜトイレにこだわったのかを遅ればせながら悟った。かしこさんは僕にこう言ってほしかったのだ。『じゃあいいです』と。でないと話の流れから言って僕を家に上げることになってしまいきつと気まずいことになる。というか、今とても気まずい。こんな時間に突然押し掛けて、部屋に入れてもらえるのは芸能人と迷子の子どもだけだ。でも僕は子ども、と言えなくもないが不審者で、無理。

僕はくりかえって星野さんを見る。かしこさんは無言のうちに家の中に入り、いまさらトイレはいいですなんて言えない。だからこれはSOSのサイン。

「おじゃましまーす」

無視してさらに断りにくい雰囲気を作りやがった。でも、入りやすい雰囲気にはなった。もしかしたら僕のSOSはきちんと伝わったのかもしれない。

「お、おじゃましまーす」

おっかなびつくり入る。突然過保護な父親に灰皿を投げつけられるかもしれない、とはさすがに思っていないが、なんとなくナイーブな僕である。

玄関に入った感想は一言。せまっ！ 玄関ではない、部屋が、だ。ドアを開けるとまず見えるのが6畳程度の小じんまりしたキッチン

付きの部屋と、その大部分を占領するベット、および小さな机。以上。どうもみても一つの家族が暮らす家ではなくて、僕と同一年くらいの女の子の部屋と、ひとり暮らしの大学生が住む部屋を無理やり合体させたような感じの、変な部屋だ。そんなものが玄関入ってすぐの部屋であること、および、その部屋には、他の部屋に通じる扉が見当たらないこと、二つの情報から導き出される結論は？

「かしこさん、ひとりで住んでるの？」

かしこさんは無言で玄関わきを指差す。WC、ワールドベースボールクラシック、ではなくてトイレ。さっさと用をすませるとおっしゃっているらしい。

ではひとまずそうさせてもらおう。質問タイムはそのあとだ。

ちなみに星野さんはちゃっかりと、かしこさんの部屋に入り込んでいた。

二章 その16

女の子の部屋にあがりこむのは礼儀知らずではないのか？

深い問いだ。トイレから出た僕はかしこさんの部屋（家？）を覗き込み、星野さんとかしこさんが可能な限り距離をとって対坐しているのを見つけ、立ち尽くしている。

二人とも何も言ってくれない。もしかしてずっとここに立っているとでもいうのだろうか？ 雨宿りさせてもらっている分際で偉そうなことは言えないから僕も黙っている。立っておけと言うなら立っておくさ。

暇なので、聞いてみる。

「1Kですか？」

間取りの話。

「座ってください」

「ああ、これはどうも」

なんだ、入ってよかったんじゃないか。

僕はいそいそと、と言っても入り口から体の半分を入れる程度に、つつましく侵入、それから正座して部屋を見回す。まったく乙女な感じはしない。少年の部屋、といっても通用しそうだ。全体的に青系統で統一された家具が落ち着いた雰囲気を作り、たくさんの本があることも相まって勉強しなくてはいけない気持ちになる、ような気がする。

「え〜と、ひとり暮らし？」

さっき露骨に避けられた質問を再び。迷惑かな？ と思ったけど、かしこさんは答えてくれた。

「……まあ」

「へ〜、じゃあ、食事も君が作ってるの？」

「……母が持つてきます」

それってひとり暮らし？ 感覚としては、ちょっと離れた子ども

部屋みたいなものか？ でも何のかために？

僕の疑問を見てとったか、かしこさんが補足する。

「……ここからだと学校が近いので」

「うらやましい理由だ。かしこさんはお金持なのかもしれない。」

「そっか……」

「……」

「またも沈黙。ひよっとして迷惑なのだろうか？ よく考えればも

う夜も遅いし、

「もしかして寝てたのを起こしてしまったのでしょうか？」

「……いえ、勉強してましたので」

「へえ〜。さすがですね」

「……まあ、明日はテストですし」

「ああ、そうでしたね、てすと……って、テストおお！？」

何の話だ。僕は嘘だと言ってほしくて星野さんのほづを見る。

「そっだよ」

いつのまに読み始めたのか、教科書で顔を半分ほど隠して答える。

「そういえば、昨日は大山に持って帰ってもらっていたのに、今日は

そうしていない。それはすべてテストのためだったというのか！？」

「だって、こないだテストしたじゃん！」

八つ当たり気味に叫ぶ。星野さんが無視したので、代わりにかし

こさんが、

「……夏休み前にもう一回するって、先生が言ってましたよ、こな

いだのテストの後すぐに。」

「……それからうるさいです」

「が
ん」

「がつくしと膝をつく僕。ちなみに小声。」

「まあ、今日の授業を全部寝て過ごしてたから、もしかして知らない

のかも、とは思っていたけどね」

「じゃあ、教えてよ！」

「なんで、私が敵に塩を送るような真似を」

「て、敵って……」

「成績ワースト50は夏休みに補講だって。だからなるべくたくさんの人に悪い成績をとってほしいんだ」

「最低だ……」

僕を蹴落としてもいい成績がとりたいと言っのか？ そんなご無体な。

なんとかしなければ、星野さんは敵。ではもう味方は彼女しかないではないか！

「かしこさん、ではなかった樋口さん」

「は、はい……」

僕の真剣な顔に、かしこさん引き気味。

「僕に」

詰め寄る。かしこさん、おびえ気味。

「僕に勉強を教えてください！」

「え、えっと……」

「お願いします」

土下座。星野さんが僕を睨んでいるような気がするが無視。

「その」

「僕に勉強を」

僕は全身全霊誠意をこめてお願いしようとして、

「うるさいですっ……」

遮られた。

「おしえてくださいいい」

尻すぼみになる。なさけない。

「……私だって勉強しなくてはならないので、迷惑です」

やっぱり僕の周りには敵しかいないのか？ ああ、僕は孤独だ。

大聖堂に忍び込もう。そこを僕の死に場所としよう。ごめんよパトラッシュ。

「……でも、質問くらいなら」

「え！ いいの？」

僕はたちまち復活する。

「ありがとう！ 君は命の恩人だよ！」

「……そんな大げさな……それから」

「うるさいよ」

星野さんに怒られる。

僕たちは勉強しながら、夜を明かした。

二章 その17

クラスメイトと夜通しの勉強会、なんていうと青春しているように聞こえるが、実際にやってみるとな〜んだ、こんなもんかという程度のものであった。僕を除く二人は周囲の雑音を任意にシャットダウンする能力を持っているらしく、途中から僕の質問、および文句（ね〜無視しないでよ〜）に何の反応も示してくれなくなったため激しく疎外感を感じたりもした。でも、ひとりで行ったら絶対に長続きしない勉強が、真面目な二人に囲まれてやると長続きするものだと学ぶことができた。なんと昨晚のトータル勉強時間は2時間38分プラスマイナス10分（過去最高）、誤差が生じたのは僕がそのくらの時間で眠ってしまったため、いったいいつの間に寝てしまったのか、星野さんに足でけり起こされたときには東の空が輝いていた。かしこさんのお母さんは、いつも朝の6時に食事を持ってくるということで、鉢合わせしないよう、余裕を持って5時30分にお暇させてもらい、後は昨日と全く同じ。ゾンビな星野さんと、元氣な僕は朝からかしこさんをストーカーして登校したのだった。

「だから、今日こそはお前を倒すっ!」

「だから、ってなんだよ」

斎藤は朝からつれない。テスト前の高揚した気持ちを伝えているというのに。

「今回の僕は一味違うのだ。なんたってあの、かしこさんに教えてもらったんだからな!」

「な、なんだって〜」

「棒読みかい!」

「どうせ、あのフリフリハンカチを頭に巻いて勉強したとか、そんなのたる? この変態野郎」

「失礼な……まあ、いや、男なら結果で語ろうぜ」
「精一杯男らしく言ってみる。ダンディーなつもり。」

「お前に負ける気しないけどな、こないだも50点くらい点差があったし」

「ふっ、後で泣き目をみることになるぞ」

「いや、もうやめろよ。お前にダンディー路線は無理だつて」
カチンときた。

僕は自信があった。昨晚 ほとんど今朝か の勉強で感じたあの充実感。かしこさんのつくる頭よさげフィールドが僕のポテンシャルエネルギーを底上げし、地球の脱出速度を上回っている、なんて意味不明な妄想が頭をよぎるくらい来ているのだ、閃きの何かが一体テストで何を閃くつもりなのか分からないけれど。

で、いよいよテスト開始。並んでいたのはいつも通り宇宙語でした。

「しくしく」

「突っこまねーぞ」

机に突っ伏す僕に斎藤がひどいことを言う。こんな有様になってしまった以上、ギャグにするよりほかないというのに、だから頑張っただけというのに、斎藤は突っ込んでくれないというのだ。そんな、そんなことって！

「ボケはな、突っ込まれないと、そこで終わってしまうんだーっ！」
「まあ、あんまり落ち込むなよ。今回のテストは難しかったからな、平均点も低いだろうよ」

「低いって、どのくらい？」

「知るかよ。俺は半分くらいしか解けなかったぜ」

「半分って、じゃすと50？ それとも30から70？ それとも40から60？」

「細かいやつだな、お前らしくもない、いつもみたいに『テストよ

り大切なものがある』って開き直れよ、ちなみに答えておくと、たぶんジャスト50くらいだ」

「負けた……補講が」

「補講？ ああ、でもあれ下から50人だったろう？ うちの学校、生徒が何人いると思ってるんだよ、そうそうワースト50なんて

……って、お前は前回50切ってたんだっただな、あッはッはッはッはッはッはッは！ すまん、すまん」

ばしばし背中をたたかれる。くそっ！ 泣きそっだ。

「うるせ　　っ！　ちよつとトイレ行ってくるっ！」

「ハンカチはいらねーか？　あッはッはッはッはッはッはッは！」

「このっ！　地獄に落ちろ、バーカっ！」

僕は席を立った。

二章 その18

トイレの前でかしこさんに会った。無視するのもアレなので声をかける。

「やあ、どうだった？」

かしこさんはちらりと僕を確認すると、つぶやくように。

「……駄目でした」

だ、駄目でした。だって！？ 僕は驚きのあまり目を見張る。

謙遜か？ いや、彼女の様子を見る限り本当に憔悴しているようだ。となると駄目だった、というのは事実で、彼女が駄目だったということは、僕はすっごく駄目だったということなのか！？

「駄目だった、って……どれくらい？」

「聞かないでください」

「す、すみません」

そんなに駄目だったのか……。

僕は慰めてあげべきか迷った。僕自身、傷心中の身であるのに、僕なんかが慰めてしまったら傷の舐めあい、かえって彼女のプライドを傷つけるのではないか、迷いつつも、かしこさんのことが他人事に思えず慰める。

「今回はね、難しかったからさ、しょうがないよ。平均点も低いだろうしさ、うん、大丈夫さ」

うんうん、そうだ、大丈夫だ。かしこさんに、ではなく自分にかける慰めの言葉。むなし。かしこさんも反応してくれないし。

「じゃあ、僕はこれから……用があるので、これで」

「……はい」

用といってもトイレだけだ。

三日目ともなると、ストーカーのイロハも分かってこようというもの。僕らは、かしこさんがコーナーに消えてから身を隠していた

電柱を飛びだし次の電柱へ以下略を淡々とこなしていた。

「この新しい特技を、何かに生かせないものだろうか……」

「探偵事務所でも開けば？」

会話まで出来るこの余裕っぷり。

「探偵事務所か……いいかもね、勉強しなくてもよさそうだし」

「まあね、うちの学校で成績ワースト50に入るようじゃ、普通の就職先はないだろうしね」

「ぐっふーっ！ なぜそれを？」

「あのでつかいのと、でかい声で話してたからだよ。まる聞こえ」

あのでつかいのは斎藤のことだろう。まあ、分かりやすい表現だがせめてクラスメイトの名前は覚えよう、それが礼儀というもの。それはおいといて、聞き捨てならない発言があったので指摘しなければ。

「星野さんだつて、人のこと言えないんじゃないのかい？ 僕を蹴落としてまで補講を避けようだなんて……本当は君のほうこそヤバイんじゃない？」

僕は根に持つタイプだ。テストのことを僕に隠し、あまつさえ自分だけ勉強しようだなんて、許すまじき！ そんな薄汚いことをする人間が成績優秀なわけがないではないか。しかし彼女は、

「初めてのテストだからね、転校してからの。だから、ちょっとナイーブになってるだけだよ。ちなみに私が前通っていた学校は……」
「……」
「……」
「……」
「……」

「……だから、正直な話、この学校はレベル低いんだよね……」
「……」
「……」
「……」
「……」

だめだ、根本的に負けている。頭の作りとか遺伝とかが違うに違いない。しかし星野さんはやはり都会育ちなのか、はじめて見たときから垢ぬけているとは思っていたけど。

「ふ、ふっん、そうなんだ。レベル低いんだ。へ〜」

精一杯虚勢を張ってみる。

「うん、でもばーちゃん家の近くに、他に学校ないしね、仕方なく

君の学校に来たわけ」

でも、そんな有名校からわざわざ無名のうちの学校に転校してきたのはなぜだろう？　一瞬浮かんだ疑問を慌てて消去する。立ち入った話は嫌いだ。代わりに違うことを口にする。

「縁は異なるもの、ってね」

「そうだね、君にあったのも縁があつたんだらうね……私に会えてよかつた？」

「ほう、君がそんなことを気にする人間だつたとは驚きだよ」

「どういう意味かすごく気になるけど……迷惑じゃないかな、ってさ、こうして面倒くさいことに付き合わせちゃってるし、私もすこし、ほんの数オングストロームくらい申し訳ないな、って思ってるね」

本当に驚きだ。

でも、なんて答えよう。すごく気恥ずかしいけど、やっぱりこは素直に言った方がいいのだろう。

「……よかつたと思ってるよ」

「私といると、不幸になるかもよ、それでもいいの？」

「不幸って、君は貧乏神か何かなのかい？　でも、いいさ。僕はもととすつごい不幸だから、ちよつとやそつとの不幸が増えても、どおつてことない」

「そうか」

星野さんのほうから意図的に顔をそらす。くさいセリフを言いすぎて恥ずかしい。

「面倒くさいことも、本当に嫌になつたらいつでもやめられるしね」

これは本心。星野さんが困ろうがどうしようが、気が乗らないときはすつぽかすだらう。

「うん。それでいいよ。面倒くさいことも、今日でひと段落つきそつだし」

「どういうこと？」

雰囲気が変わつたので、星野さんのほうを向くシャイな僕。

「たぶん今日、動きがあるよ」
星野さんは、確信をこめて言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4219i/>

はいだらけ

2010年10月11日05時07分発行